平成 28 年度

千葉県

袖ケ浦市内遺跡発掘調査報告書

中六遺跡第 21 次調査

大竹古墳群第 117 号墳・向神納里遺跡

打越北上原古墳群第３号墳第２次調査

平成 29 年３月

袖 ケ 浦 市 教 育 委 員 会

平成 28 年度

千葉県

袖ケ浦市内遺跡発掘調査報告書

中六（ちゅうろ）遺跡第 21 次調査
大竹（おおたけ）古墳群第 117 号墳・向神納里（むこうかんのり）遺跡
打越北上原（うちこしきたうえはら）古墳群第３号墳第２次調査

平成 29 年３月

袖 ケ 浦 市 教 育 委 員 会

序　　文

袖ケ浦市は、東京湾東岸の房総半島中央部に位置し、小櫃川によって形成された南部の肥沃な田園地帯、下総台地の南端に位置する北部の住宅街、京葉工業地帯の一角を担う西部の工場地帯と様々な顔を持っています。

本地域は、恵まれた立地・自然環境から、古代より陸・海路ともに交通の要所であり、人、物、そして文化の行きかう結節点でありました。それは現在も同じです。東京湾アクアラインや東関東自動車道館山線、圏央道などの恵まれた交通網のもと、袖ケ浦駅海側地区のまちづくり、椎の森工業団地整備をはじめとして、人・物の集まる場所として、更なる開発が見込まれます。

しかし、開発に伴う地中の遺跡への影響は多大であり、開発と遺跡の共存は容易ではありません。そこで本市では、国及び県の補助を受け、開発等に先立つ発掘調査を実施し、地中に維持することができなくなった埋蔵文化財を記録に残すことで後世に伝えております。また、市内の重要な遺跡に対しては、保存目的の発掘調査を実施し、遺跡の重要性を一層明らかにするとともに、今後の保存・活用について検討してまいります。

これらの発掘調査の記録を取りまとめた本書が、多くの市民の皆様に、郷土の歴史への理解や地域の魅力を再発見していただく契機になれば幸いです。

最後になりましたが、千葉県教育庁教育振興部文化財課の方々には、発掘調査の実施から本書の刊行に至るまでご指導を頂き、厚くお礼申し上げます。また、土地所有者及び関係者の皆様には、ご理解とご協力を頂きましたことに対しまして心から感謝申し上げます。

平成２９年３月

袖ケ浦市教育委員会
教育長　　川島　悟

例　　言

１．本書は、平成 28 年度に発掘調査を実施した中六遺跡第 21 次調査、大竹古墳群第 117 号墳・向神納里遺跡、打越北上原古墳群第３号墳第２次調査を収録した平成 28 年度袖ケ浦市内遺跡発掘調査報告書である。

２．調査は、国庫・県費補助事業として千葉県教育委員会の指導を受け、発掘及び整理作業、報告書刊行までの業務を袖ケ浦市教育委員会が実施した。

３．発掘及び整理作業期間は下記のとおりである。

中六遺跡第 21 次調査

発掘：平成 28 年４月 11 日～同年４月 19 日　　整理：平成 28 年 12 月５日～同年 12 月 16 日

大竹古墳群第 117 号墳・向神納里遺跡

発掘：平成 28 年７月 11 日～同年９月 21 日　　整理：平成 28 年 12 月１日～平成 29 年２月 27 日

打越北上原古墳群第３号墳第２次調査

発掘：平成 29 年１月６日～同年１月 23 日　　整理：平成 29 年２月 14 日～同年２月 27 日

４．各遺跡の所在地は、下記のとおりである。

中六遺跡第 21 次調査

袖ケ浦市蔵波字中六 1,259 番地 51 の一部、1,260 番地１の一部

大竹古墳群第 117 号墳・向神納里遺跡

袖ケ浦市下根岸字上神納里 620 番地１

打越北上原古墳群第３号墳第２次調査

袖ケ浦市打越字北上原 360 番地、上 170 番地４

５．各遺跡の発掘及び整理作業、報告書執筆は大河原務が行った。

６．本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第１図　国土地理院発行　1/25,000 地形図　「奈良輪」「姉崎」「木更津」「上総横田」

第２図　袖ケ浦市発行　　1/2,500 地形図　「№13」「№14」「№18」「№19」

第４図　袖ケ浦市発行　　1/2,500 地形図　「№41」「№42」「№45」「№46」

第11図　袖ケ浦市発行　　1/2,500 地形図　「№41」

７．本書で使用したトレンチ名や遺構名は、基本的に発掘時のものを使用した。

８．今回の調査に伴う遺物・記録類等は、袖ケ浦市教育委員会で保管する予定である。

９．遺跡のコードは、中六遺跡（ＳＧ 013）、大竹古墳群第 117 号墳・向神納里遺跡（ＳＧ 019）、打越北上原古墳群第３号墳（ＳＧ 120）である。各遺跡の調査は、数次にわたり実施されているため、括弧付けの数字で調査次数を示している。（第 21 次調査　→　(21)）

10．発掘から報告書刊行にいたるまで、千葉県教育委員会をはじめとする関係諸機関の方々からご指導・ご協力をいただいた。また、現地での作業においては調査区の土地所有者各位のご協力をいただいた。記して謝意を表したい。

目　次

序文
例言
序章　　調査概要 …… 1
　１．調査に至る経緯　　２．調査経過　　３．調査組織
第２章　中六遺跡（21）…… 3
　１．周辺の遺跡と環境　２．調査と遺跡の概要　３．まとめ
第３章　大竹古墳群第 117 号墳・向神納里遺跡 …… 6
　１．周辺の遺跡と環境　２．調査と遺跡の概要　３．まとめ
第４章　打越北上原古墳群第３号墳（２）……17
　１．周辺の遺跡と環境　２．調査と遺跡の概要　３．まとめ

挿　図　目　次

第１図　調査遺跡位置図
第２図　中六遺跡調査区位置図
第３図　中六遺跡（21）遺構確認状況図、出土遺物実測図
第４図　大竹古墳群地形図
第５図　大竹古墳群第 117 号墳・向神納里遺跡全体図
第６図　大竹古墳群第 117 号墳土層断面図
第７図　大竹古墳群第 117 号墳主体部実測図
第８図　大竹古墳群第 117 号墳出土鉄製品実測図①
第９図　大竹古墳群第 117 号墳出土鉄製品実測図②
第10図　大竹古墳群第 117 号墳出土臼玉実測図
第11図　打越北上原古墳群地形図
第12図　打越北上原古墳群第３号墳地形図、復元図
第13図　打越北上原古墳群第３号墳遺構確認状況図

表　目　次

表１　大竹古墳群第 117 号墳出土鉄鏃計測表
表２　大竹古墳群第 117 号墳出土臼玉計測表

図　版　目　次

図版１　中六遺跡（21）
図版２　大竹古墳群第 117 号墳・向神納里遺跡①
図版３　大竹古墳群第 117 号墳・向神納里遺跡②
図版４　大竹古墳群第 117 号墳・向神納里遺跡③
図版５　打越北上原古墳群第３号墳（２）①
図版６　打越北上原古墳群第３号墳（２）②

序章　調査概要

１．調査に至る経緯

袖ケ浦市教育委員会では、市内に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地内において計画される中小企業等の開発行為に際して、遺跡の実態を把握するための確認調査や、個人農地造成に際して、本調査を実施するため、国及び県の補助を受けている。また、重要な遺跡の保存目的の範囲確認調査についても補助を受けて実施している。

平成 28 年度は、次の３件についての発掘から報告書刊行までを実施した。

１　中六遺跡（21）（確認調査）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 店舗造成に伴う調査

２　大竹古墳群第 117 号墳・向神納里遺跡（本調査）‥‥ 個人農地造成に伴う調査

３　打越北上原古墳群第３号墳（２）（確認調査）‥‥‥‥ 保存目的の範囲確認に伴う調査

２．調査経過

中六遺跡（21）

４月 11 日：機材搬入、環境整備、仮設トイレ設置、12 日：重機搬入、重機によるトレンチ掘削、写真撮影、13 日：基準点測量、重機によるトレンチ掘削、遺構確認作業、平面・断面実測、写真撮影、14 日：雨天のため作業中止、15 日：遺構確認作業、平面・断面実測、写真撮影、18 日：重機による埋戻し、重機搬出、19 日：写真撮影、環境整備

大竹古墳群第 117 号墳・向神納里遺跡

７月 11 日：基準点測量、写真撮影、12 日：環境整備、重機搬入、重機による周溝部表土掘削、仮設トイレ設置、13 日：重機による周溝部表土掘削、14 日：重機による周溝部表土掘削、重機搬出、周溝部掘削、15 日：周溝部掘削、19 日：周溝部掘削、墳丘部表土掘削、20 ～ 22 日：雨天のため作業中止、25 ～ 27 日：周溝部掘削、墳丘部表土掘削、28 ～ 29 日：墳丘部表土掘削、８月１～２日：雨天のため作業中止、３日：墳丘部表土掘削、断面実測、４日：断面実測、写真撮影、５日：周溝部掘削、断面実測、写真撮影、８日：墳丘部表土掘削、写真撮影、９日：墳丘部表土掘削、断面実測、10 日：墳丘部表土掘削、15 日：写真撮影、16 日：雨天のため作業中止、17 日：測量、18 日：雨天のため作業中止、19 日：測量、墳丘部掘削、22 日：雨天のため作業中止、23 ～ 25 日：測量、墳丘部掘削、26 日：測量、墳丘部掘削、主体部掘削、平面・断面実測、写真撮影、29 日：主体部掘削、写真撮影、30 日：雨天のため作業中止、31 日：主体部掘削、９月１日：主体部掘削、２日：主体部掘削、断面実測、５日：主体部掘削、６日：主体部掘削、平面実測、７～８日：雨天のため作業中止、９～ 12 日：墳丘部掘削、13 日：雨天のため作業中止、14 ～ 16 日：墳丘部掘削、断面実測、写真撮影、20 日：雨天のため作業中止、21 日：平面実測、写真撮影、環境整備、仮設トイレ撤去

打越北上原古墳群第３号墳（２）

１月６日：基準点測量、10 日：環境整備、機材搬入、写真撮影、人力によるトレンチ掘削、11 ～ 16 日：人力によるトレンチ掘削、17 日：人力によるトレンチ掘削、写真撮影、断面実測、18 日：写真撮影、平面・断面実測、19 日：平面実測、20 日：雨天のため作業中止、23 日：人力による埋戻し、環境整備、写真撮影

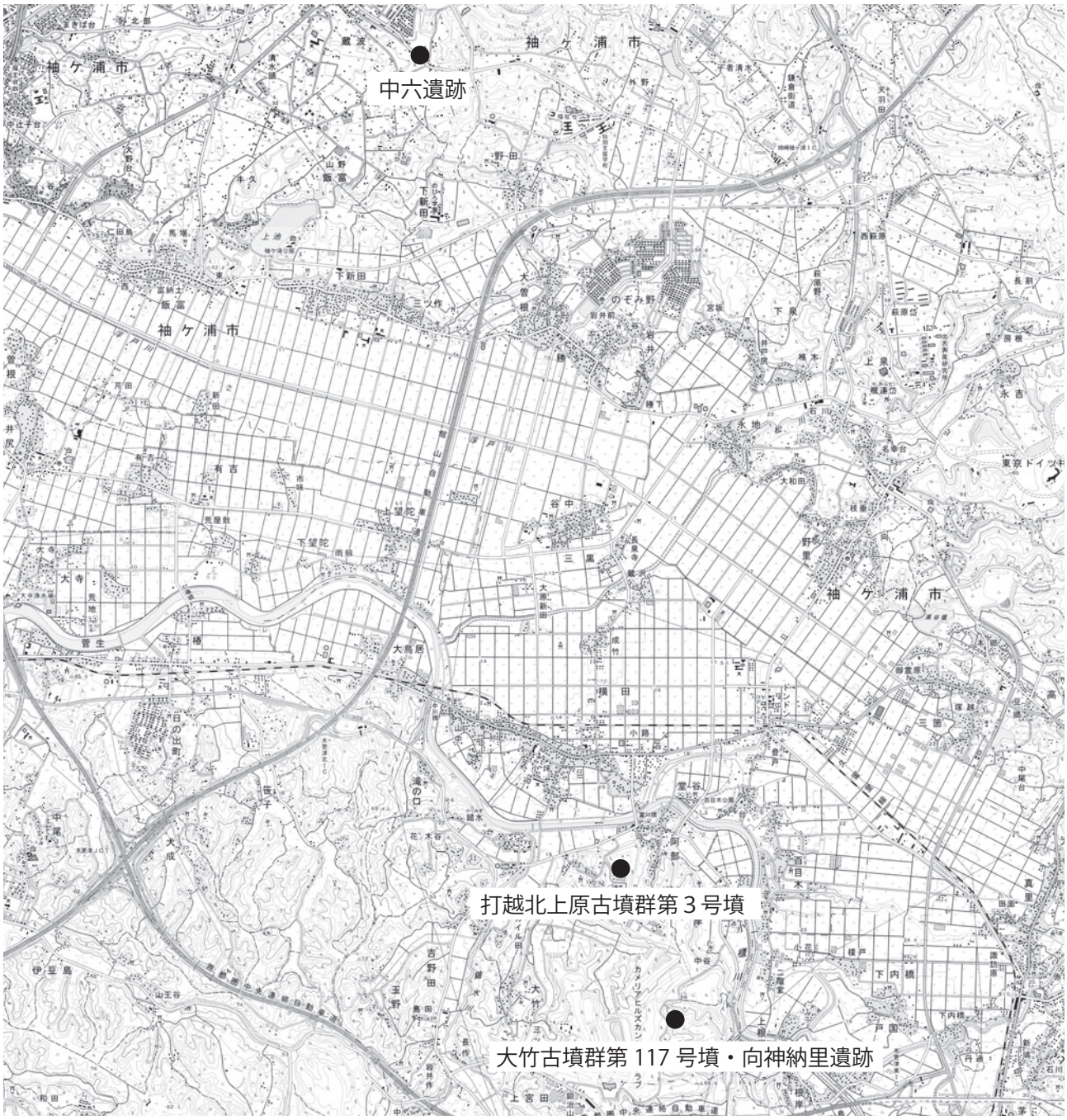
3．調査組織

調査主体　袖ケ浦市教育委員会

教　育　長	川島　悟	教 育 部 長	井口　崇
教育部次長	森田　泰弘	教育部参事兼生涯学習課長	原田　光雄

生涯学習課文化振興班

副課長兼文化振興班長	西原　崇浩	主　　査	田中　大介
副 主 査	前田　雅之	主任主事	大河原　務



第１図　調査遺跡位置図　（1：50,000）

第２章　中六遺跡（21）

１．周辺の遺跡と環境（第２図）

中六遺跡は、袖ヶ浦台地の中央部に位置し、蔵波川中流域左岸標高 40 ｍ～ 45 ｍほどの台地上に展開する。本遺跡は、昭和 61 年度から平成 26 年度まで 20 回にわたる確認調査・本調査が実施されており、遺跡北部の蔵波川によって形成された谷に面する部分を中心に縄文時代早期の炉穴群、古墳時代前期の集落、古墳時代前期から中期の古墳など多くの遺構が検出されている。本遺跡周辺は、縄文時代早期の炉穴群や礫群が検出された寒沢遺跡・堂庭山Ｂ遺跡・正源戸Ｂ遺跡、古墳時代前期の竪穴住居が検出された神田遺跡・美生遺跡群など、蔵波川流域を中心に、中六遺跡と同時期の遺跡が密集している。

２．調査と遺跡の概要（第３図、図版１）

調査方法　確認調査は、店舗造成事業に伴い 921.36 ㎡を調査対象として実施した。トレンチは、1.5 ｍ×６ｍを基本に設定し、全部で 17 箇所設置した。ただし、樹木が植えられている調査区東側や、道路に隣接する調査区南側などは、地割等に合わせて調査可能箇所にトレンチを設定した。トレンチの掘削は重機により行い、遺構確認作業は人力により行った。

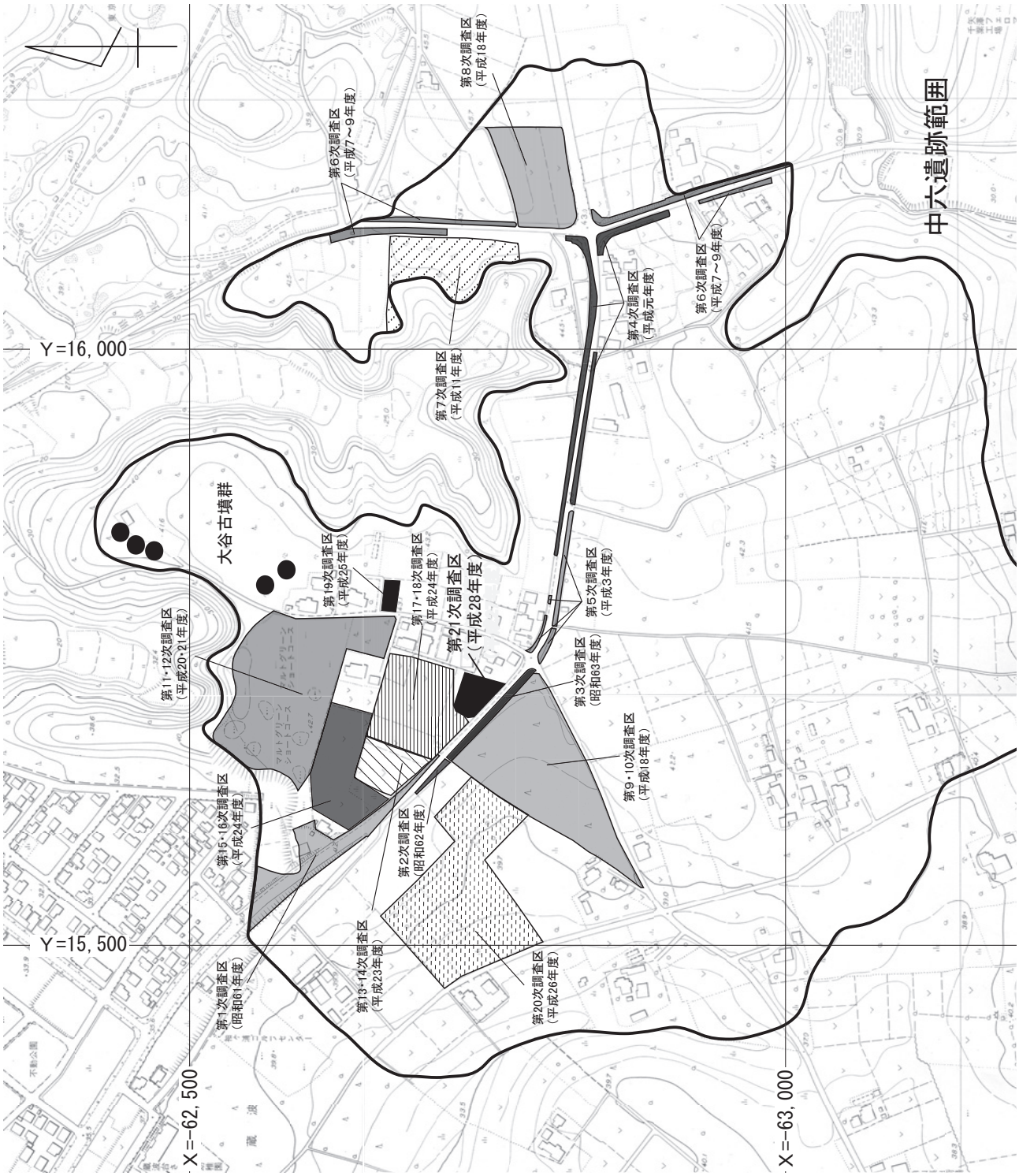
遺構・遺物　調査区は過去に耕作地として利用されており、調査区全域に厚さ 60 ～ 80 ㎝の盛土や耕作土が堆積している。旧表土層は削平されているが、その下層に堆積した５層以下の土層堆積は、調査区西側に向かって緩傾斜している。調査区西側の一部は５層が確認できず、深い位置まで耕作の影響を受けているものと思われる。調査前の調査区東側は樹木が生い茂っており、現在は整地のため、約 10 ㎝の明褐色土による盛土がされている。

遺構は、９・14 トレンチで竪穴住居２軒、15 トレンチで竪穴住居１軒、16 トレンチで竪穴住居１軒を検出した。竪穴住居は、方形の平面形態、出土遺物より古墳時代前期のものと考えられる。竪穴住居は調査区西側から３軒、南側から１軒の検出であり、遺構密度は希薄である。９・14 トレンチから検出された竪穴住居２軒は重複関係が不明確なため、１軒の可能性もある。竪穴住居の主軸は、４軒とも近隣調査区から検出された同時期の竪穴住居と同様に北西－南東を示すと推測する。規模は９・14 トレンチの竪穴住居でのみ確認でき、一辺が約 3.8 ｍであることから、近隣調査区から検出された竪穴住居の中では小型のものに分類される。

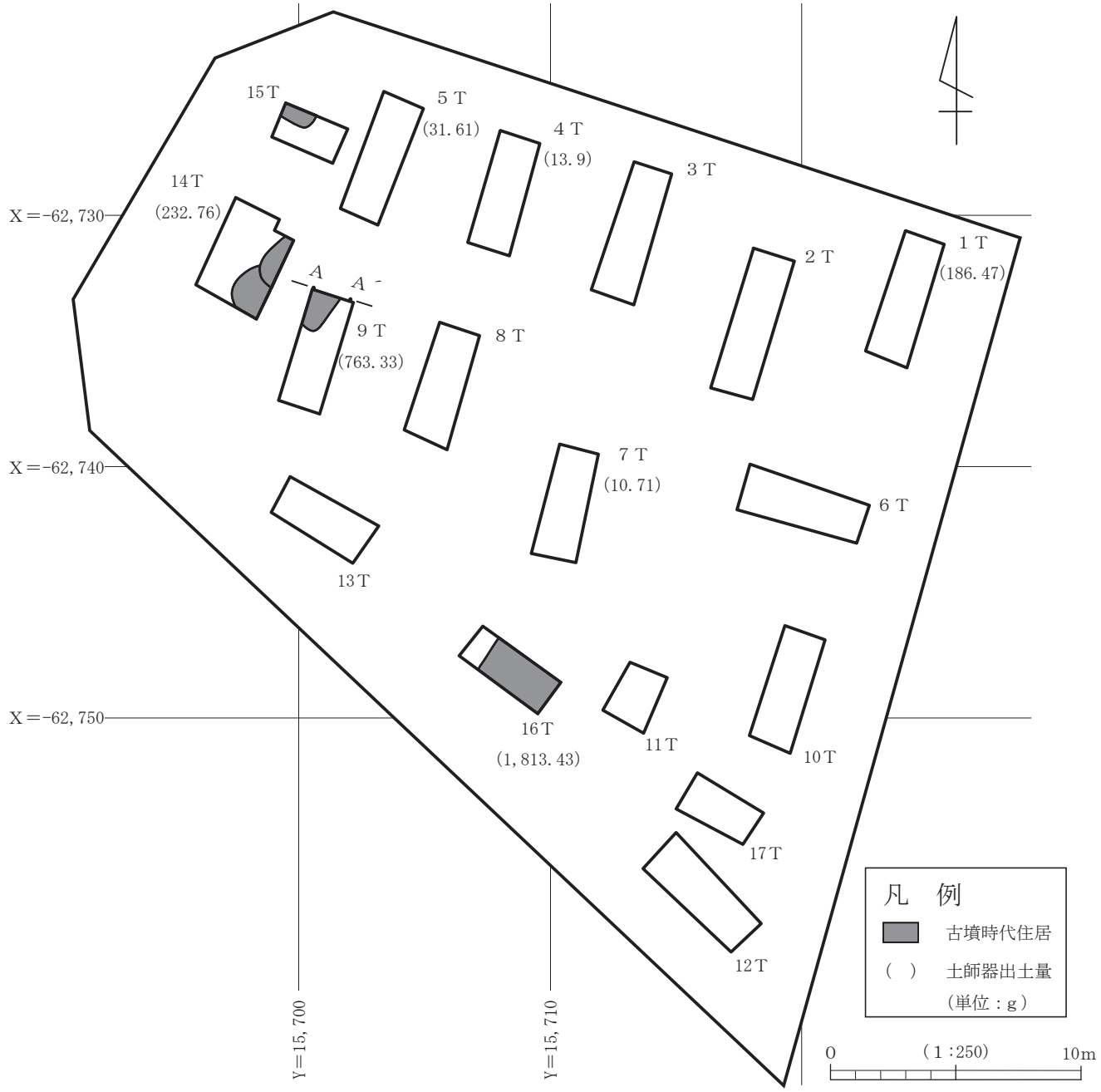
出土遺物は、古墳時代土師器 3,052.21 ｇ、礫 125.08 ｇであった。遺構を検出したトレンチからの出土遺物量が多く、特に 16 トレンチからの出土遺物量が多い。トレンチ全体では、調査区北側からは各トレンチにおいて少量ではあるが出土遺物があるのに対して、調査区南側では 16 トレンチ以外からの出土遺物はない。１は１トレンチ出土の土師器甕の底部である。胴部外面は縦位のヘラケズリが施され、底部外面には木葉痕が残る。内面は激しく剥落している。２は９トレンチ出土の土師器甕の口縁部である。頸部には輪積痕が残り、指頭による圧痕が廻る。内外面共に横位のナデが施される。３は９トレンチ出土の土師器器台である。外面は縦位ハケメ調整後に縦位ミガキ、受部内面はミガキ、脚部内面は横位ハケメが施される。脚部に３か所の穿孔が施され、外面から時計回りに穿孔されている。

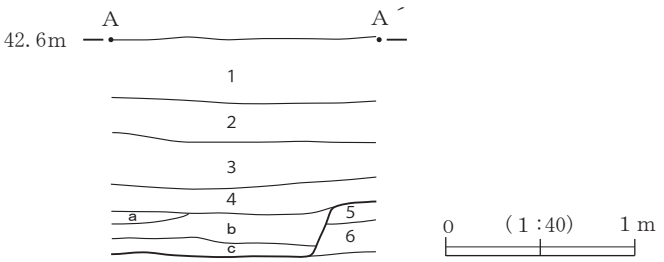
３．まとめ

本調査区では竪穴住居４軒を検出した。規模・平面形が類似し、同時期の遺物が出土していることから、第 10 次調査区で検出された竪穴住居を南限とする第 17・18 次調査区で検出された竪穴住居群と同一の集落と考えられる。遺物の出土傾向からも、集落が北西側を中心に広がり、南側にかけてまばらになっている様子が推測できる。近隣調査区から検出される縄文時代早期の遺構・遺物は、本調査区からは検出されなかった。

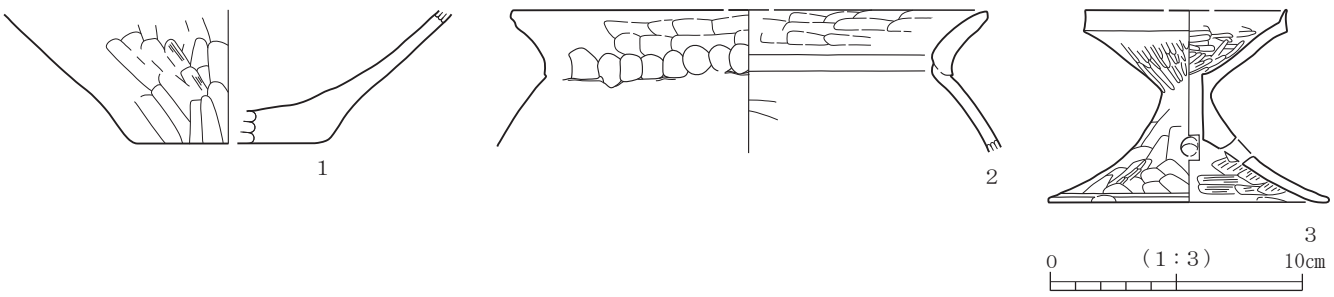


第２図　中六遺跡調査区位置図（１：5,000）





1	黒褐色	粘性：強い	しまり：強い	ロームブロック極めて多量含む、盛土層
2	黒褐色	粘性：強い	しまり：やや強い	ロームブロック、炭化物少量含む、盛土層
3	黒褐色	粘性：やや強い	しまり：やや強い	ロームブロック少量含む、盛土層
4	茶褐色	粘性：やや強い	しまり：やや弱い	ローム粒子、炭化物少量含む、盛土層
5	茶褐色	粘性：やや強い	しまり：普通	ローム粒子少量含む
6	ローム漸移層			
a	黒褐色	粘性：やや強い	しまり：普通	住居覆土
b	黒色	粘性：強い	しまり：普通	ローム粒子少量含む、住居覆土
c	黒褐色	粘性：やや強い	しまり：やや強い	ロームブロック少量含む、住居覆土



第３図　中六遺跡（21）遺構確認状況図、出土遺物実測図

第３章　大竹古墳群第 117 号墳・向神納里遺跡

１．周辺の遺跡と環境

大竹古墳群第 117 号墳・向神納里遺跡は、小櫃川中流域左岸標高 65 ｍほどの台地上に展開する。南北に長い台地は西側の鎗水川、東側の小櫃川から進入する小支谷によって複雑な地形を呈する。

大竹古墳群は８つの遺跡からなる大竹遺跡群に存在する 100 基を超える弥生時代から奈良・平安時代にかけての古墳・方形周溝墓・方形区画墓の総称であり、本調査区は大竹遺跡群の向神納里遺跡にあたる。向神納里遺跡は、大竹遺跡群の東端に位置し、最も広大な面積を有する。検出された遺構は、縄文時代早期から中期の竪穴住居や、弥生時代中期から古墳時代前期の竪穴住居及び方形周溝墓等を中心とする。弥生時代中期の方形周溝墓からは須和田式土器が出土している。

大竹古墳群周辺の台地上には下根岸古墳群、打越北上原古墳群、椿古墳群等の多くの古墳群が存在している。その多くが円墳を主体として、比較的小型の前方後円墳を１～２基含むという特徴を有し、大竹古墳群も同じである。ただし、前方後円墳は向神納里遺跡内には所在せず、台地の北東側に位置する内出原遺跡内に所在する。向神納里遺跡内にも多数の古墳が所在するが、大半が確認調査のみで盛土保存されており、時期を特定できないものが多い。数少ない本調査実施の古墳において、第 27 号墳からは、周溝部底面より県内でも出土例の少ない円筒埴輪棺が出土した。時期は古墳時代中期末から後期初頭に位置付けられる。

２．調査と遺跡の概要（第４～ 10 図、図版２～４）

調査対象　今回の調査は、平成 21 年度に確認調査を実施して規模等を確認した大竹古墳群第 117 号墳・向神納里遺跡の本調査である。個人農地造成に伴い 200 ㎡を調査対象とした。

調査方法　平成 21 年度の確認調査時に作成された墳丘地形図・遺構確認状況図をもとに、周溝部及び墳丘部表土の掘削を行った。表土掘削後、墳丘部・周溝部の等高線図・平面図を作成し、墳丘部を切断した。墳丘切断は、平成 21 年度のトレンチ・樹木を避けて南北・東西軸を設定し、４分割した。主体部は主軸に直交するように南北・東西軸を設定し、４分割した。掘削は、周溝部表土及び周溝部内堆積土の一部を重機により行い、それ以外の箇所は人力により行った。

調査前の状況　見かけの規模は、東西 12.5 ｍ、南北 10.6 ｍを測り、ほぼ円形を呈する。墳頂部標高は 66.6 ｍであり、現表土面からの高さは約 1.2 ｍを測る。墳頂部及び墳丘北西側には樹木が生い茂る。墳丘北側の裾部は平坦になっており、後世に掘削等の影響を受けたものと推測される。

墳丘の形状と規模　墳丘は南北 11.4 ｍ、東西 10.9 ｍを測り、ほぼ円形を呈する。墳頂部標高は 66.4 ｍであり、旧表土層からの高さは 0.8 ｍを測る。墳頂部は南北 2.0 ｍ、東西 2.2 ｍの不定形を呈する。ただし、墳頂部より主体部が確認できるため、古墳構築時の盛土の多くは流れ出てしまったものと推測される。

墳丘の構築　墳丘盛土下には、上から黒褐色の旧表土層、茶褐色のローム漸移層、黄褐色のローム層の順に堆積しており、これらを掘削して盛土に利用したものと推測される。旧表土層は東西方向では東側の谷部に向けて、南北方向では北側の谷部に向けて緩傾斜している。

墳丘の構築は、以下の過程を経たものと推測される。

第１段階：墳丘中心部における平坦面造作

まず、黒色土（87 ～ 96 層）や黒褐色土（97 ～ 105 層）による墳丘中心部における平坦面の造作である。黒褐色土は北側・東側を中心に盛土されており、最も高く盛土されている墳丘北側で厚さ 0.15 ｍである。前述のとおり、北側・東側は台地の谷部に面しており、旧表土層は緩傾斜しているため、他地点よりも標高が低い。この黒褐色土は緩傾斜面であった古墳構築範囲に平坦面を造作した際に使用した土と推測する。黒褐色土上層の黒色土は、極めてしまりが強く、墳丘中心部のやや南側を中心に直径約 6.5 ｍほどの円形の範囲に盛土されている。黒色土層上部の標高は 65.8 ～ 65.9 ｍを測る。古墳の墳丘下及び周辺の堆積土からは黒色土が確認されていないため、別の場所から運搬されてきた可能性も考えられる。

第２段階：土手状盛土の構築

次に、第１段階で盛土された円形の黒色土平坦面縁辺部に土手状盛土（62 ～ 86 層）を構築する。黒褐色土を中心に構成される。土手状盛土を構築することで、中心部を盛土する際の流れ出しを防いでいたものと思われる。残存する土手状盛土の高さは、北側 0.3 ｍ、東側 0.35 ｍ、南側 0.25 ｍ、西側 0.15 ｍであり、幅は北側 2.7 ｍ、東側 2.1 ｍ、南側 1.7 ｍ、西側 1.6 ｍである。南側・西側は攪乱等により残存状態は良くない。現表土層直下から検出されていることから、土手状盛土上部は流れ出てしまったことが推測できるが、残存状態の良い北側・東側の形状から逆Ｕ字状の断面と推測される。北側以外の土手状盛土は周溝内周から約１ｍの範囲に構築されているのに対して、北側のみ周溝内周から２ｍを測る。主体部の位置も墳丘中心からやや南側に位置し、墳丘規模も南北方向は東西方向と比べ約１ｍ長いことから、意図的に南寄りに構築されたものと推測する。古墳北側は急傾斜の谷になっているためであろうか。北側・東側の堆積状況より、土手状盛土は墳丘外側から内側の順に構築したものと推測され、周辺の堆積土では旧表土に類似するため、周溝掘削土を使用したものと推測される。

第３段階：土手状盛土外部の盛土

次に、土手状盛土外部の盛土（49 ～ 61 層）である。黒褐色土を中心に構成される。墳丘上部の盛土が残存していないため、第４段階との新旧関係は断面図からは不明であるが、土手状盛土の構築土と類似するため、土手状盛土の拡幅を外側に向けて行った後に、土手状盛土内部の盛土を行ったものと推測した。

第４段階：土手状盛土内部の盛土

次に、土手状盛土内部の盛土（15 ～ 48 層）である。黄褐色土を中心に構成される。土手状盛土内部は、中心部にある程度まで盛土した後に、土手状盛土内縁部から墳丘中心部に向けて盛土されている。本段階の盛土層内に主体部は構築されている。調査時は主体部確認面を標高 66.2 ｍとしたが、墳丘盛土断面を整合すると主体部掘り方の掘り込みラインに連続するような斜めのラインが確認できるため、主体部は残存盛土上部より掘り込まれていたことがわかる。しかし、第４段階上部及び以後の盛土は残存していないため、主体部が第４段階と第５段階のどちらで構築されたかは不明である。

第５段階：上部の盛土

墳丘上部の盛土が残存していないため、第４段階以後にどのような盛土が行われていたかは不明である。しかし、現表土層直下より主体部の掘り込みが確認できることから、上部に盛土があったことは疑いようがない。第４段階の上層の一部（15 ～ 18 層）及び主体部の上部堆積土から茶褐色土が確認できることから、同様の土による盛土が推測される。

周溝　幅は、北側が調査区外であったため、不明であるが、東側 2.2 m、南側２m、西側 2.7 mを測り、周溝底部から墳頂部までの高さは、北側・東側で 1.9 m、南側・西側で 1.8 mを測る。周溝の断面は、南側のみ緩やかなU字形で、南側以外は逆台形を呈する。北側・東側は台地の縁辺となっており、周溝底部から墳頂部までが若干高いのは、旧表土層が低かったためと推測する。周溝内南西部に長軸 1.48 m、短軸 1.16 m、深さは南端の最深部で 0.2 mの楕円形の浅い掘り込みが確認できた。周溝底部精査時に確認したため、どの層から掘り込まれたものであったかは不明である。ただし、底面が南側に緩傾斜しており、凹凸も激しく、出土遺物もないことから、周溝内土坑ではなく、周溝掘削時の深堀箇所と判断した。墳丘盛土は黒色土、黒褐色土が中心であり、周溝が黄褐色のローム層をかなり削って作られていることから推測すると、周溝掘削土がすべて墳丘に盛土されていないように思われる。周溝から出土した遺物は、縄文土器 255.19 g、礫 2,200.37 g である。周溝覆土中～上層からの出土遺物がほとんどである。縄文時代の遺物であるため、周溝内に流れ込んだものと推測する。出土量は、土器は北西側、礫は北東側で多い傾向がみられる。

主体部　主体部は第４段階の墳丘盛土層を掘削して造作された埋葬施設である。墳丘中心からやや南側の墳頂部直下から検出された。

棺部　主体部中央に設置され、主軸方向はＮ－ 85°－Wをとり、ほぼ東西方向を意識して設置されたものと推測できる。規模は長軸 2.1 m以上、短軸は東端部 1.1 m、中心部・西端部 1.2 mの幅広の方形を呈し、確認面からの深さは 0.1 ～ 0.13 mを測る。木棺直葬であり、棺部東側底面は標高 66.05 mを測り、底面はほぼ水平である。棺部西側は底面が若干高まっているが、樹木が隣接し、根の影響も考えられることから、構築時の形を残しているかは不明である。

掘り方　規模は長軸 3.42 m、短軸 1.82 m、確認面からの深さは 0.16 mを測る。平面形は隅丸方形で、短軸断面は逆台形を呈する。底面は東側が西側に比べて５㎝ほど深くなっている。深くなっている範囲には黒褐色土が充填され、棺部底面を水平に成形している。

副葬品　鉄剣１振、鉄鏃 15 本、臼玉 33 点が出土した。１は鉄剣である。最大長 35.2 ㎝、最大幅 2.7 ㎝、最大厚 0.45 ㎝、重量 144.58 g であり、所々に木質が遺存している。茎部と刀身の間に、最大幅 1.5 ㎝の横方向の植物質繊維が見えることから、布状のものが巻かれていたものと推測する。棺部のほぼ中心部からやや北側より出土し、刃先は西方向に向けられていた。標高 66.15 mからの出土であり、棺部床面から 13 ㎝を測るため、棺の上に置かれて埋納されたものと推測する。２～ 16 は鉄鏃である。主体部北西側壁際の標高 66.2 ～ 66.25 m、底面から 16 ㎝付近の掘り方充填土内から、15 本がまとまって出土した。出土位置が掘り方充填土内であることから、棺埋葬後に高さ 15 ㎝前後まで黄褐色土を充填して棺を固定し、鉄鏃を埋納後、再び充填することで埋戻しをしたことが推定できる。鉄鏃は先端部を西に向けるが、棺部の長軸、鉄剣よりやや北向きのＮ－ 75°－Wに埋納されていた。10 ～ 16 は錆着により束になっている。また、２には１本分、３には２本分の他の鉄鏃の矢柄部が付着しているため、10 ～ 16 と密接して埋葬されたものと思われる。２・４～７は鏃身と頸部の一部、８・９・14 ～ 16 は頸部の一部と茎部のため、それぞれ同一個体の可能性もある。形状はいずれも長頸鏃であり、鏃身は２～４、10 ～ 13 が鑿箭又は長三角形、５・６が三角形、７が片刃箭である。５・６は左右非対称の小型三角形であり、鏃身部が短く、鏃身関部は小さいつくりである。７は錆のため不明瞭であるが、関部に小さな逆刺をもつ。頸部長は 10.05 ～ 11 ㎝と大きな個体差は見られない。鑿箭又は長三角形の鏃身長は 2.7 ～ 3.15 ㎝の範囲のものが多いが、11・12 のような小型のものも含む。２・３には鏃身関部に皮のようなものが付着し、８は矢柄の一部に朱のようなものが付着している。８・

９・11・14 は矢柄に巻きつけた口巻が良好に遺存している。いずれも樹皮巻であり、表面に現れている樹皮幅は１～ 1.5㎜ほどである。13 は茎部に撚られた糸状のものが巻きついた状態で出土した。太さは 0.5㎜前後である。茎部と矢柄の接着部に当たるため､矢柄をより強固に固定するために巻かれたものであろうか。鉄剣・鉄鏃ともにＸ線撮影は行っていない。17 ～ 49 は滑石製の臼玉である。最大径 4.7 ～ 5.7㎜、最大高 2.5 ～ 5.5㎜、孔径 1.8 ～ 2.2 ㎜、重量 0.07 ～ 0.18 ｇと規模に大きなばらつきは見られない。色調は緑灰色で、黒色や灰白色の不純物を斑に含む。上下面共に丁寧に研磨されているものは少なく、側面は上下より研磨され、側面の中心部が若干膨らんでいるものが多い。棺部覆土を篩にかけた結果検出されたものであるため、明確な出土位置は不明である。しかし、17 ～ 48 が棺部の北西側、49 が鉄剣下の標高 66.1 ～ 66.2 ｍの覆土からの出土であるため、主体部１・５・６層で出土したものと推測される。また、同一箇所で採取した覆土から 32 点が出土したため、まとまって埋納されたものと思われる。鉄剣よりも下層からの出土であるが、正確な出土位置が不明なため、首に垂下されていたか、被葬者の周りに撒かれていたかは不明である。

その他の遺構・遺物　古墳南東側よりＳＤ 001 を検出した。規模は、長軸 2.3 ｍ以上、幅 0.5 ｍ、確認面からの深さ 0.25 ｍで、主軸方向Ｎ－５°－Ｅを呈する。古墳周溝により破壊されているため、古墳構築以前の溝である。墳丘西側に延びているが、墳丘盛土下のローム漸移層からは検出されなかったため、周溝部内で途切れるものと思われる。方形周溝墓の可能性がある。一部のみの調査であるが､遺物は出土しなかった。

墳丘盛土より縄文土器 60.24 ｇ､礫 125.43 ｇ､墳丘盛土下層のローム漸移層(Ⅲ層)より縄文土器 63.86 ｇ、礫 864.2 ｇが出土した。出土土器は繊維を含み、口縁部に貝殻腹縁文を施すものがあることから、縄文時代早期後葉のものと推測する。

３．まとめ

今回の調査により、100 基を超える弥生時代から奈良・平安時代にかけての古墳・方形周溝墓・方形区画墓からなる大竹古墳群の中で、第 117 号墳は古墳時代の円墳であることが判明した。また、主体部棺部より鉄剣１振、臼玉 33 点、主体部掘り方より鉄鏃 15 本が出土した。古墳に伴う土器は出土しなかったため、明確な古墳構築時期は不明であるが、出土した鉄鏃から古墳時代中期後半のものと推測する。

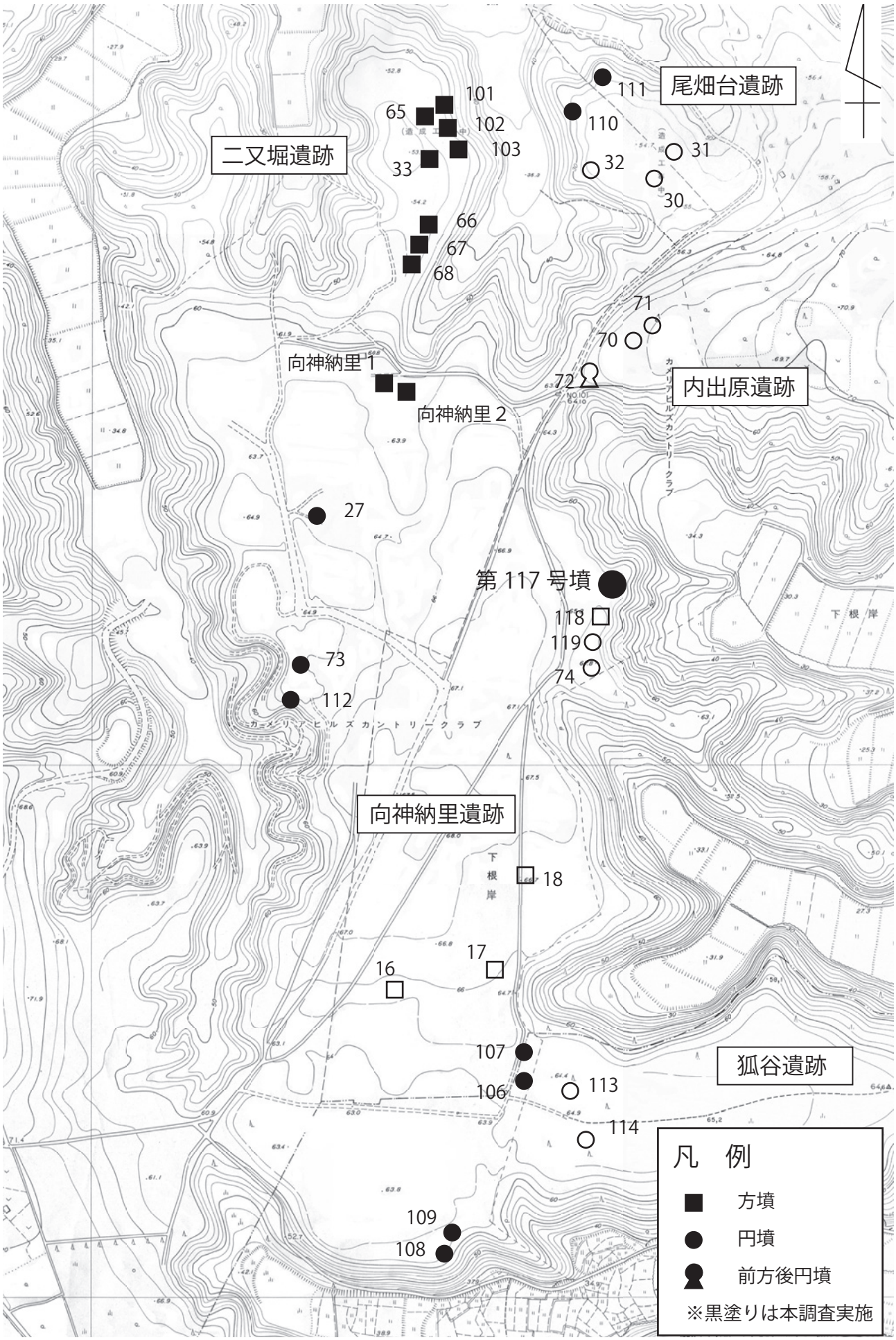
本古墳はいわゆる西日本技法といわれる、土手状盛土を墳丘縁部に構築する技法を用いた古墳であり、西上総地域において同技法を用い構築された古墳は、前期末から中期の円墳である市原市大厩浅間様古墳や後期の円墳である木更津市大山台第 34 号墳が挙げられる。いずれも近隣に同技法を用いられた古墳はなく、単発的にしか確認することができない。

大竹古墳群は 100 基を超える古墳群からなるが、本調査が実施された古墳は少なく、時期は不明確なものが多数を占めている。向神納里遺跡内の時期が判明している古墳は、前期の向神納里第１・２号墳、中期から後期の第 27・73・112・117 号墳、後期の第 108・109 号墳である。台地中央の平坦部は弥生時代の方形周溝墓が乱立し、前期の２基は台地北側、中期から後期の４基は台地東側・西側の台地縁辺部、後期の２基は南側の台地縁辺部に所在する。各時期の墓域は混在せず、古墳時代の墓域が北部から南部に推移していった様子が窺える。

参考文献

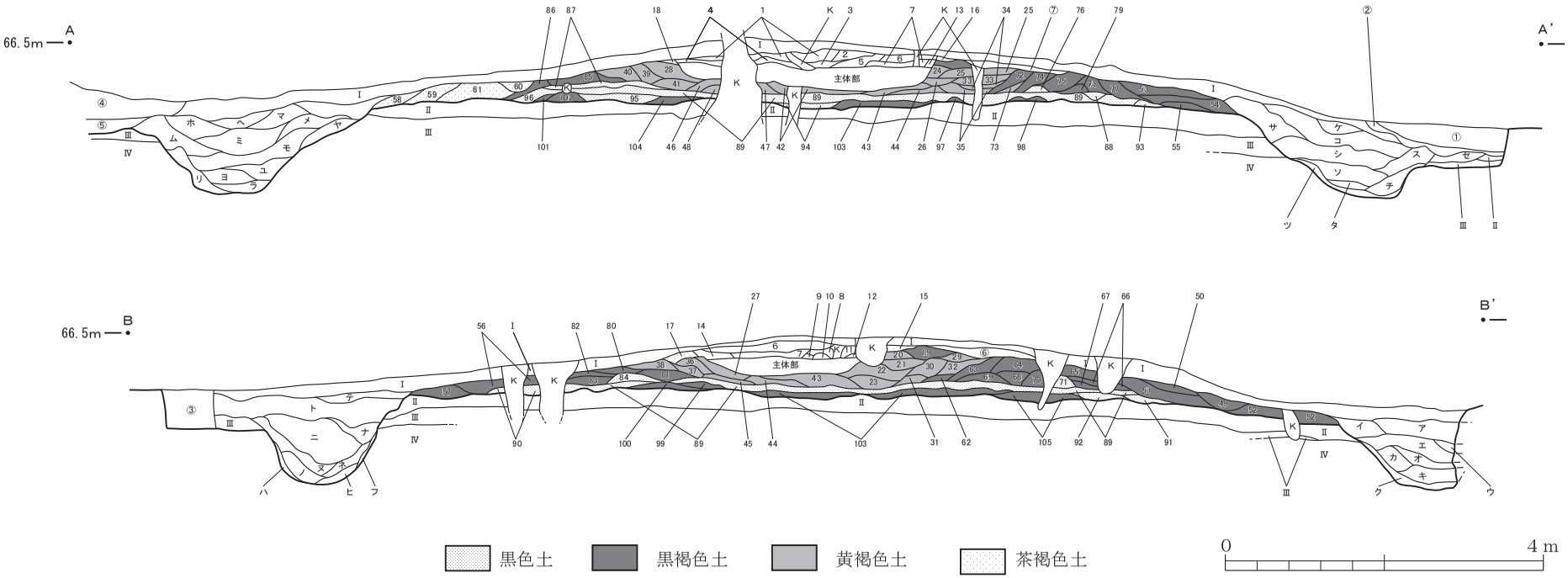
青木　敬　2003 『古墳築造の研究―墳丘からみた古墳の地域性―』六一書房

小高　幸男　1997 「君津地域の様相」『多知波奈考古』第２号　橘考古学会



第４図　大竹古墳群地形図（１：5,000）

第５図　大竹古墳群第 117 号墳・向神納里遺跡全体図（１：100）



第６図　大竹古墳群第 117 号墳土層断面図（１：80）

基本層序
Ⅰ　現表土（茶褐色土）
Ⅱ　旧表土（黒褐色土）
Ⅲ　ローム漸移層（茶褐色土）
Ⅳ　ソフトローム層（黄褐色土層）

客土
① 黄褐色　粘性：強い　しまり：強い　ガラ多量含む
② 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：強い　ローム粒子多量含む
③ 茶褐色　粘性：やや弱い　しまり：強い　ローム粒子、黒色土多量含む
④ 茶褐色　粘性：やや強い　しまり：強い　ロームブロック、黒色土多量含む
⑤ 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　ローム粒子、茶褐色土少量含む
⑥ 黒褐色　粘性：普通　しまり：やや強い　ローム粒子、茶褐色土多量含む
⑦ 茶褐色　粘性：強い　しまり：強い　黒色土多量、ローム粒子少量含む

周溝部
ア 茶褐色　粘性：普通　しまり：やや強い　ローム粒子少量含む
イ 黒色　粘性：やや強い　しまり：普通　ローム粒子少量含む
ウ 黒色　粘性：普通　しまり：やや弱い　茶褐色土少量含む
エ 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：普通　ローム粒子、茶褐色土少量含む
オ 黒色　粘性：やや強い　しまり：強い　茶褐色土少量含む
カ 黒褐色　粘性：強い　しまり：やや強い　ローム粒子、茶褐色土少量含む
キ 黒色　粘性：強い　しまり：普通　ローム粒子少量含む
ク 黄褐色　粘性：強い　しまり：やや弱い　黒色土多量含む
ケ 茶褐色　粘性：普通　しまり：弱い　黒色土多量含む
コ 黒色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　ローム粒子、茶褐色土少量含む
サ 黒色　粘性：やや強い　しまり：やや弱い　ローム粒子多量、茶褐色土少量含む
シ 黒褐色　粘性：普通　しまり：やや強い　ローム粒子、黒色土少量含む
ス 黒色　粘性：やや強い　しまり：強い　ローム粒子多量、茶褐色土少量含む
セ 黒色　粘性：やや強い　しまり：強い　ローム粒子多量、茶褐色土少量含む
ソ 黒色　粘性：普通　しまり：やや強い　ローム粒子、茶褐色土少量含む
タ 黒色　粘性：やや強い　しまり：普通　ローム粒子多量含む
チ 黒褐色　粘性：普通　しまり：やや弱い　ローム粒子多量、茶褐色土少量含む
ツ 茶褐色　粘性：強い　しまり：弱い　ローム粒子多量含む
テ 黒色　粘性：やや弱い　しまり：強い　茶褐色土少量含む
ト 黒褐色　粘性：やや弱い　しまり：やや強い　ローム粒子、茶褐色土少量含む
ナ 黒褐色　粘性：強い　しまり：やや弱い　ロームブロック多量含む
ニ 黒色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　ローム粒子、茶褐色土多量含む
ヌ 黒褐色　粘性：強い　しまり：やや弱い　ローム粒子、ロームブロック多量含む
ネ 茶褐色　粘性：強い　しまり：やや弱い　ローム粒子、ロームブロック少量含む
ノ 茶褐色　粘性：強い　しまり：普通　ローム粒子多量、ロームブロック少量含む
ハ 黄褐色　粘性：強い　しまり：やや弱い　黒色土多量含む
ヒ 茶褐色　粘性：やや弱い　しまり：普通　ローム粒子、黒色土多量含む
フ 黄褐色　粘性：強い　しまり：やや弱い　黒色土多量含む
ヘ 黒色　粘性：強い　しまり：やや強い　茶褐色土少量含む
ホ 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　ローム粒子、茶褐色土少量含む
マ 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：強い　ローム粒子多量、茶褐色土少量含む
ミ 黒色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　ローム粒子、茶褐色土少量含む
ム 黒色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　ローム粒子少量含む
メ 茶褐色　粘性：やや強い　しまり：普通　ローム粒子多量、黒色土少量含む
モ 茶褐色　粘性：やや強い　しまり：やや弱い　ローム粒子、茶褐色土多量含む
ヤ 茶褐色　粘性：強い　しまり：やや弱い　ローム粒子多量含む
ユ 茶褐色　粘性：強い　しまり：やや強い　ローム粒子、黒色土多量、ロームブロック少量含む
ヨ 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：強い　ローム粒子多量、茶褐色土少量含む
ラ 茶褐色　粘性：強い　しまり：やや強い　ロームブロック多量含む
リ 茶褐色　粘性：普通　しまり：普通　ローム粒子少量含む

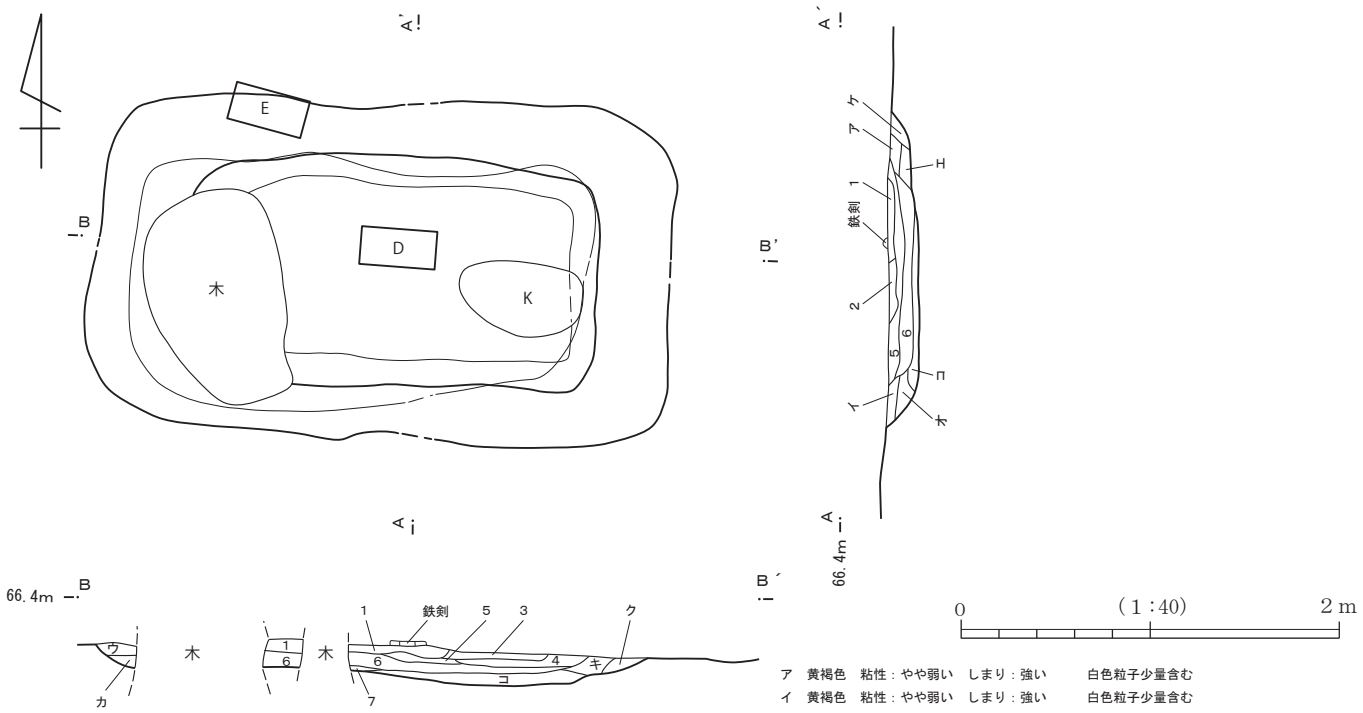
主体部
1 茶褐色　粘性：普通　しまり：やや弱い　黒色土多量、ローム粒子少量含む
2 茶褐色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　ローム粒子少量含む
3 茶褐色　粘性：やや強い　しまり：普通　ローム粒子多量含む
4 茶褐色　粘性：強い　しまり：やや強い　ローム粒子多量、黒色土少量含む
5 茶褐色　粘性：やや強い　しまり：強い　黒色土多量、ローム粒子少量含む
6 茶褐色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　黒色土多量、ローム粒子、茶褐色土少量含む
7 茶褐色　粘性：やや強い　しまり：強い　ロームブロック多量、ローム粒子、黒色土少量含む
8 茶褐色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　ローム粒子多量、黒色土少量含む
9 茶褐色　粘性：やや強い　しまり：強い　ローム粒子多量、黒色土少量含む
10 黄褐色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　ローム粒子多量、黒色土少量含む
11 茶褐色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　ローム粒子、黒色土少量含む
12 黄褐色　粘性：強い　しまり：強い　ロームブロック多量含む
13 茶褐色　粘性：普通　しまり：普通　ロームブロック少量含む
14 茶褐色　粘性：やや弱い　しまり：やや強い　ローム粒子、黒色土少量含む

土手状盛土内部
15 茶褐色　粘性：弱い　しまり：普通　ローム粒子少量含む
16 茶褐色　粘性：強い　しまり：やや弱い　ローム粒子少量含む
17 茶褐色　粘性：やや弱い　しまり：やや強い　黒色土多量含む
18 茶褐色　粘性：やや強い　しまり：普通　黒色土少量含む
19 黒褐色　粘性：普通　しまり：やや弱い　ローム粒子、黒色土少量含む
20 黄褐色　粘性：強い　しまり：強い　ロームブロック多量、黒色土少量含む
21 黄褐色　粘性：強い　しまり：強い　茶褐色土多量、黒色土少量含む
22 黄褐色　粘性：強い　しまり：やや強い　黒色土、茶褐色土多量含む
23 黄褐色　粘性：強い　しまり：強い　黒色土多量、茶褐色土少量含む
24 黄褐色　粘性：強い　しまり：強い　黒色土多量、ロームブロック少量含む
25 黄褐色　粘性：強い　しまり：やや強い　ローム粒子、茶褐色土多量含む
26 黄褐色　粘性：強い　しまり：普通　茶褐色土多量、黒色土少量含む
27 黄褐色　粘性：やや弱い　しまり：弱い　黒色土多量含む
28 黄褐色　粘性：やや弱い　しまり：やや弱い　茶褐色土少量含む
29 黄褐色　粘性：強い　しまり：やや強い　黒色土多量、ローム粒子少量含む
30 黄褐色　粘性：強い　しまり：普通　ロームブロック、茶褐色土多量含む
31 黄褐色　粘性：強い　しまり：やや強い　黒色土多量含む
32 黄褐色　粘性：強い　しまり：やや強い　茶褐色土多量、黒色土少量含む
33 黄褐色　粘性：強い　しまり：やや強い　黒色土、茶褐色土多量含む
34 黄褐色　粘性：やや強い　しまり：強い　黒色土、茶褐色土多量含む
35 黄褐色　粘性：強い　しまり：やや強い　茶褐色土多量、ロームブロック少量含む
36 黄褐色　粘性：強い　しまり：やや強い　茶褐色土多量含む
37 黄褐色　粘性：強い　しまり：やや強い　黒色土、茶褐色土多量含む
38 黄褐色　粘性：普通　しまり：普通　黒色土、茶褐色土多量含む
39 黄褐色　粘性：普通　しまり：普通　茶褐色土多量、黒色土少量含む
40 黄褐色　粘性：普通　しまり：普通　茶褐色土極めて多量含む
41 黄褐色　粘性：強い　しまり：やや強い　茶褐色土多量、黒色土少量含む
42 黄褐色　粘性：強い　しまり：強い　黒色土、茶褐色土多量含む
43 黄褐色　粘性：強い　しまり：強い　ロームブロック多量、黒色土少量含む
44 黄褐色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　黒色土少量含む
45 黄褐色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　黒色土、茶褐色土多量含む
46 黄褐色　粘性：普通　しまり：弱い　茶褐色土極めて多量含む
47 黄褐色　粘性：強い　しまり：やや強い　ロームブロック、黒色土少量含む
48 黄褐色　粘性：強い　しまり：やや強い　黒色土多量、ロームブロック少量含む

土手状盛土外部
49 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：やや弱い　黒色土多量、茶褐色土少量含む
50 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：弱い　ローム粒子、黒色土多量含む
51 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　黒色土多量、茶褐色土少量含む
52 黒褐色　粘性：強い　しまり：強い　茶褐色土多量、ローム粒子少量含む
53 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：強い　ローム粒子多量、ロームブロック少量含む
54 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：普通　黒色土多量含む
55 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　ローム粒子、黒色土多量含む
56 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：普通　ローム粒子多量、茶褐色土少量含む
57 黒褐色　粘性：普通　しまり：やや強い　茶褐色土多量、ローム粒子少量含む
58 茶褐色　粘性：やや弱い　しまり：やや強い　黒色土多量含む
59 茶褐色　粘性：弱い　しまり：普通　黒色土、茶褐色土少量含む
60 茶褐色　粘性：普通　しまり：やや強い　黒色土多量含む
61 茶褐色　粘性：やや強い　しまり：普通　ローム粒子、黒色土少量含む

土手状盛土
62 黒褐色　粘性：やや弱い　しまり：強い　ロームブロック少量含む
63 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　ローム粒子多量、黒色土少量含む
64 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：強い　ローム粒子多量含む
65 黒褐色　粘性：やや弱い　しまり：強い　茶褐色土多量、黒色土少量含む
66 黒褐色　粘性：やや弱い　しまり：普通　黒色土多量、ローム粒子少量含む
67 黒褐色　粘性：普通　しまり：やや強い　ローム粒子、黒色土多量含む
68 黒褐色　粘性：やや弱い　しまり：強い　黒色土多量、ローム粒子少量含む
69 黒褐色　粘性：やや弱い　しまり：強い　ロームブロック、黒色土多量含む
70 黒褐色　粘性：やや弱い　しまり：強い　ローム粒子、茶褐色土多量含む
71 黒色　粘性：普通　しまり：極めて強い　ローム粒子多量、茶褐色土少量含む
72 黒褐色　粘性：強い　しまり：強い　ローム粒子極めて多量、茶褐色土多量含む
73 黄褐色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　黒色土多量含む
74 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：強い　茶褐色土多量、ローム粒子少量含む
75 黒褐色　粘性：強い　しまり：強い　黒色土多量、ロームブロック少量含む
76 黒色　粘性：やや強い　しまり：強い　茶褐色土少量含む
77 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：強い　ローム粒子、黒色土多量含む
78 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：強い　茶褐色土多量、ローム粒子少量含む
79 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　茶褐色土多量、ローム粒子少量含む
80 黒褐色　粘性：強い　しまり：普通　黒色土多量含む
81 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：普通　ローム粒子多量含む
82 黒褐色　粘性：強い　しまり：やや強い　ローム粒子、茶褐色土多量含む
83 黒褐色　粘性：強い　しまり：強い　ローム粒子少量含む
84 黒色　粘性：やや強い　しまり：強い
85 黒褐色　粘性：強い　しまり：強い　ローム粒子、黒色土多量含む
86 黒褐色　粘性：強い　しまり：やや強い　黒色土多量、ローム粒子少量含む

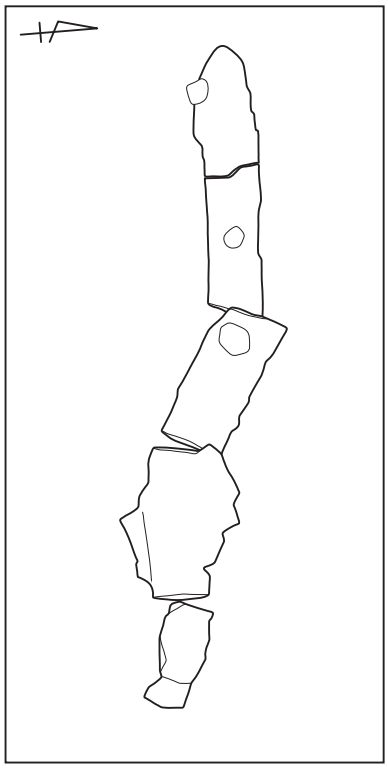
平坦部
87 黒色　粘性：やや強い　しまり：極めて強い
88 黒色　粘性：やや強い　しまり：普通　ローム粒子、茶褐色土少量含む
89 黒色　粘性：強い　しまり：極めて強い　ローム粒子極めて少量含む
90 黒色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　茶褐色土多量、ローム粒子少量含む
91 黒色　粘性：強い　しまり：やや強い　茶褐色土多量、ローム粒子少量含む
92 黒色　粘性：やや強い　しまり：強い　ローム粒子少量含む
93 黒色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　ローム粒子、茶褐色土多量含む
94 黒色　粘性：やや強い　しまり：極めて強い
95 黒色　粘性：やや強い　しまり：極めて強い　ローム粒子、茶褐色土少量含む
96 黒色　粘性：普通　しまり：普通　茶褐色土多量含む
97 黒褐色　粘性：強い　しまり：極めて強い　ローム粒子、黒色土多量含む
98 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：極めて強い　ローム粒子少量含む
99 黒褐色　粘性：強い　しまり：強い　ローム粒子少量含む
100 黒褐色　粘性：普通　しまり：強い　ローム粒子、茶褐色土少量含む
101 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　ローム粒子少量含む
102 黒褐色　粘性：強い　しまり：強い　茶褐色土多量、ローム粒子少量含む
103 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：強い　ローム粒子、黒色土多量含む
104 黒褐色　粘性：普通　しまり：極めて強い　ローム粒子少量含む
105 黒褐色　粘性：やや強い　しまり：やや強い　ローム粒子、茶褐色土多量含む



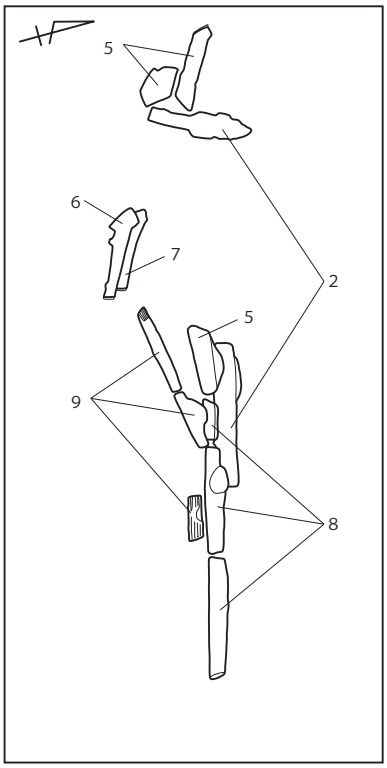
1	黒褐色	粘性：普通	しまり：やや弱い	ローム粒子多量含む
2	黒褐色	粘性：やや強い	しまり：やや弱い	黒色土多量、ローム粒子少量含む
3	黒褐色	粘性：やや弱い	しまり：やや弱い	ローム粒子、白色粒子少量含む
4	黒褐色	粘性：やや弱い	しまり：普通	黒色土多量、ローム粒子少量含む
5	茶褐色	粘性：強い	しまり：やや弱い	黒色土多量含む
6	茶褐色	粘性：強い	しまり：普通	ローム粒子多量含む
7	茶褐色	粘性：普通	しまり：やや弱い	黒色土多量含む

ア	黄褐色	粘性：やや弱い	しまり：強い	白色粒子少量含む
イ	黄褐色	粘性：やや弱い	しまり：強い	白色粒子少量含む
ウ	黄褐色	粘性：やや弱い	しまり：普通	黒色土少量含む
エ	黄褐色	粘性：弱い	しまり：やや強い	黒色土多量含む
オ	黄褐色	粘性：やや強い	しまり：強い	黒色土少量含む
カ	黄褐色	粘性：やや弱い	しまり：普通	黒色土多量含む
キ	黄褐色	粘性：やや弱い	しまり：強い	黒色土少量含む
ク	黄褐色	粘性：弱い	しまり：やや強い	黒色土ブロック少量含む
ケ	黄褐色	粘性：普通	しまり：やや強い	黒色土ブロック少量含む
コ	黒褐色	粘性：やや強い	しまり：やや強い	ロームブロック、茶褐色土多量含む

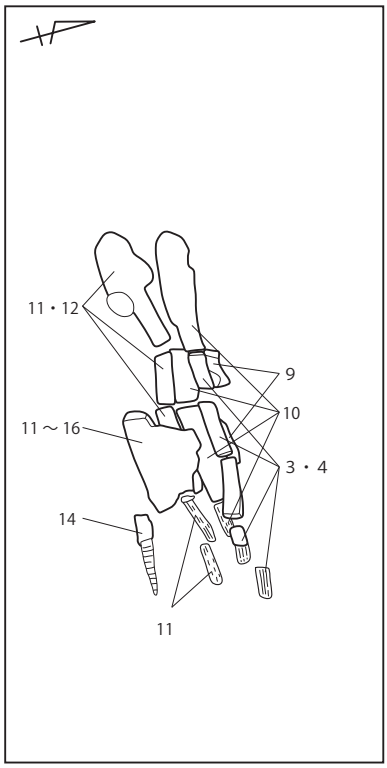
D．鉄剣出土状況



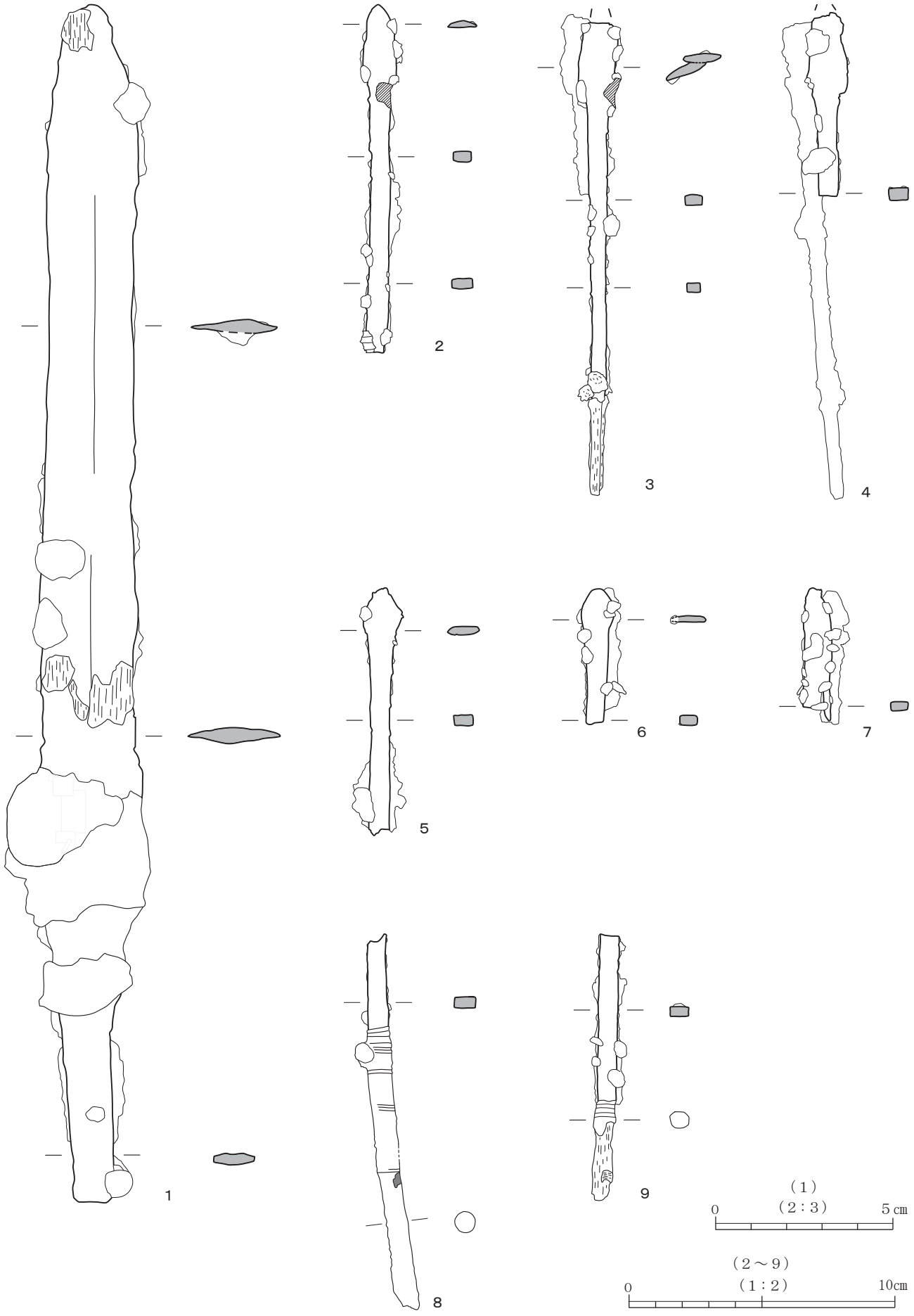
E．鉄鏃出土状況（上段）



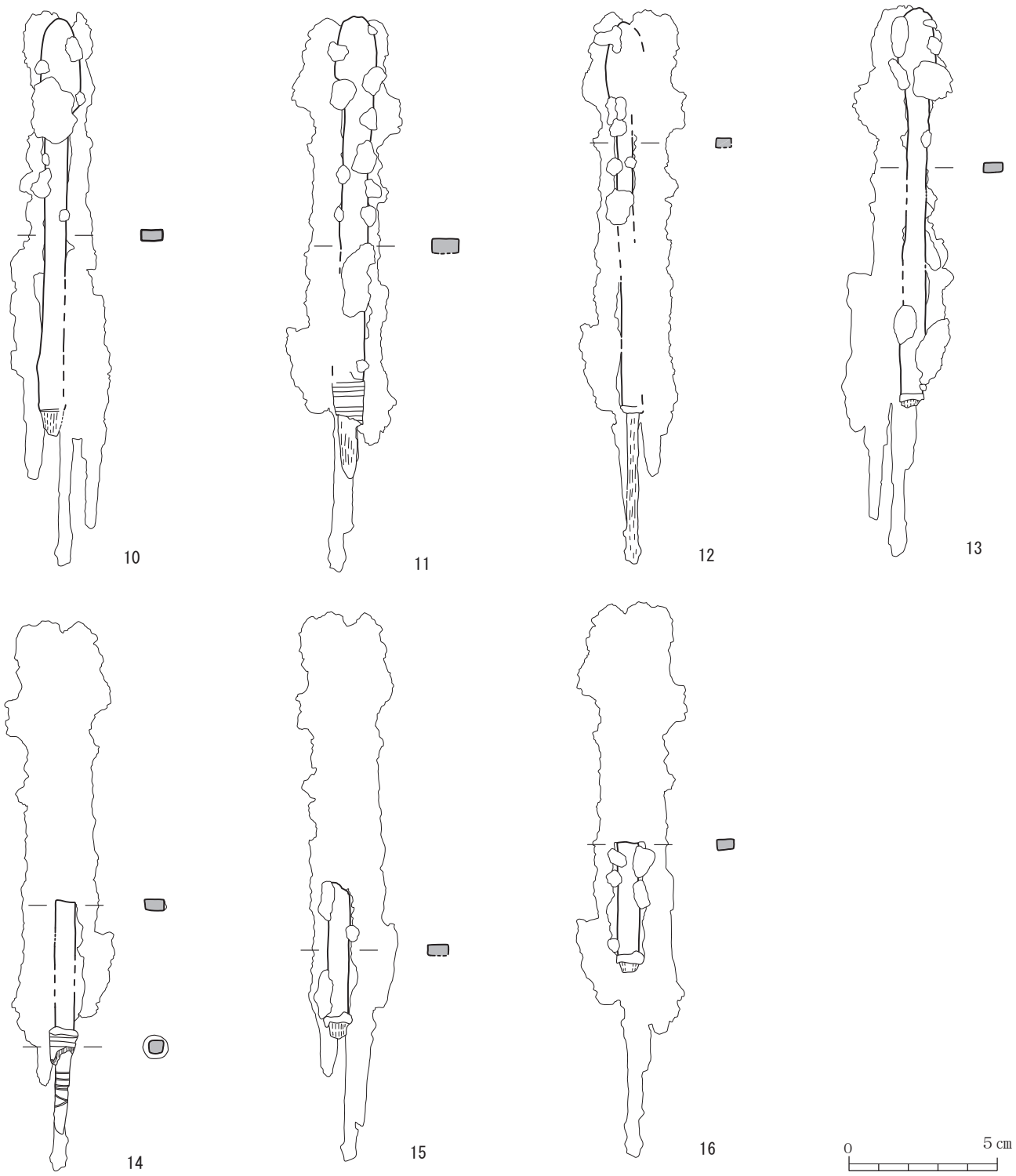
E．鉄鏃出土状況（下段）



第7図　大竹古墳群第117号墳主体部実測図



第８図　大竹古墳群第 117 号墳出土鉄製品実測図①

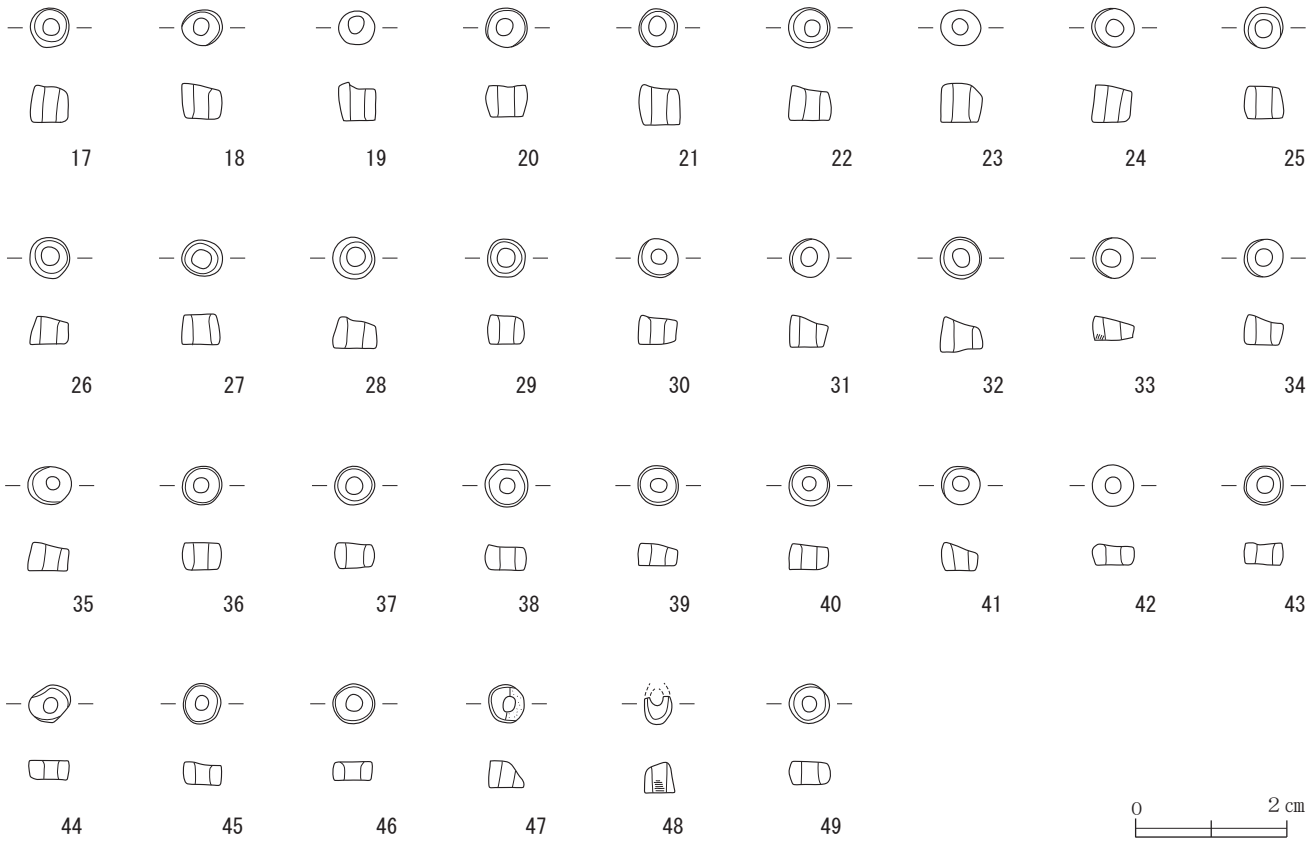


第９図　大竹古墳群第 117 号墳出土鉄製品実測図②（１：２）

表１　大竹古墳群第 117 号墳出土鉄鏃計測表

（単位：mm・g）

番号	鏃身			頸部			茎部長	重量	備考
	身長	幅	厚さ	身長	幅	厚さ			
2	29.0	13.0	2.5	101.5	7.0～8.0	3.5～4.0	－	13.33	関部に皮付着
3	31.5～	14.0	3.5	110.0	5.0～7.0	3.5～4.5	－	21.82	関部に皮付着
4	30.0～	15.0	4.0	38.5～	7.0～8.0	4.0	－		
5	17.0	15.0	3.0	77.0～	7.5	4.0	－	8.76	
6	15.0	12.5	2.0	25.0～	6.5～8.0	3.5	－	7.28	頸部に他鉄鏃の矢柄付着
7	48.0	9.0	2.5	6.0～	7.0	3.5	－		頸部に他鉄鏃の矢柄付着
8	－	－	－	35.0～	7.0～8.0	4.5	－	12.56	矢柄に朱？付着
9	－	－	－	68.5～	7.0～8.0	3.5～4.0	37.5～	10.09	
10	31.5	13.5	－	101.0	7.0～8.0	3.0～3.5	－	95.64	
11	22.0	14.5	－	100.5	9.5	4.0～5.0	－		
12	25.0	－	－	104.5	5.0	3.5	－		
13	27.0	12.5	3.0	103.0	6.5	3.0	－		
14	－	－	－	43.0～	6.5	4.0	35.0		茎部に撚糸？付着
15	－	－	－	43.0～	7.0	4.0	－		
16	－	－	－	31.5～	7.0	4.0	－		



第 10 図　大竹古墳群第 117 号墳出土臼玉実測図（１：１）

表２　大竹古墳群第 117 号墳出土臼玉計測表

（単位：mm・g）

番号	上面径	下面径	最大径	最大高	孔径	重量	出土位置	備考
17	4.0	4.0	4.7	5.0	2.0	0.18	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
18	5.0	4.5	5.1	5.0	2.0	0.18	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
19	5.0	4.0	5.0	5.0	1.9	0.15	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
20	4.7	4.2	5.2	4.2	2.0	0.17	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
21	4.5	4.7	5.2	5.5	2.0	0.17	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
22	5.0	5.0	5.5	4.5	1.8	0.17	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
23	5.2	4.7	5.2	5.0	2.0	0.16	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
24	4.7	4.5	5.0	5.0	1.8	0.18	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
25	4.0	4.5	5.2	4.5	2.0	0.15	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
26	4.0	4.5	4.7	3.7	2.0	0.13	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
27	4.0	4.7	5.0	4.0	2.0	0.14	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
28	4.7	5.5	5.7	4.2	2.0	0.17	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
29	4.2	4.0	4.7	4.0	2.0	0.14	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
30	4.7	4.7	5.0	3.7	1.8	0.11	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
31	5.0	4.5	5.0	4.2	2.0	0.13	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
32	5.0	5.0	5.5	4.7	2.0	0.13	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
33	5.2	5.0	5.5	3.2	2.0	0.10	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
34	4.7	4.0	5.0	4.0	2.0	0.13	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
35	5.0	5.0	5.0	3.8	2.0	0.15	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
36	4.5	4.0	5.2	3.5	2.0	0.13	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
37	4.5	4.2	5.2	3.5	2.2	0.11	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
38	4.7	4.5	5.2	3.2	2.0	0.15	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
39	5.0	4.7	5.2	3.0	2.0	0.11	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
40	4.5	5.0	5.2	3.7	2.0	0.12	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
41	4.7	4.0	5.0	3.7	2.0	0.10	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
42	5.2	4.5	5.5	2.7	2.0	0.10	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
43	4.7	4.5	5.0	3.0	2.0	0.10	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
44	5.0	4.7	5.2	2.7	1.8	0.09	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
45	4.7	4.5	5.2	3.0	2.0	0.10	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
46	5.0	5.0	5.2	2.5	2.0	0.07	棺部北西（標高66.1～66.2m）	
47	－	4.3	4.7	3.5	2.0	0.09	棺部北西（標高66.1～66.2m）	残存率80%
48	－	－	－	4.0	2.0	0.04	棺部北西（標高66.1～66.2m）	残存率50%
49	5.0	4.5	5.5	3.0	2.0	0.10	鉄剣下層	

第４章　打越北上原古墳群第３号墳（２）

１．周辺の遺跡と環境（第 11 図）

打越北上原古墳群は、小櫃川中流域左岸標高 40 m～ 50 mほどの台地上に展開する。本古墳群を含め、小櫃川や小櫃川の支流である鎗水川などによって開析された同台地上には、下根岸古墳群や大竹古墳群、椿古墳群、滝の口向台古墳群など多くの古墳群が存在している。その多くが円墳を主体として、比較的小型の前方後円墳を１～２基含むものであり、本古墳群も同様の特徴を有する。

本古墳群は前方後円墳２基と円墳６基の８基で構成される古墳群であったが、円墳の第８号墳は消滅してしまった。本古墳群は、北側へ延びる舌状台地の先端部と短い尾根を挟んで西側へ延びる台地上に立地し、北側台地上に前方後円墳１基、円墳３基、西側台地上に前方後円墳１基、円墳２基が存在する。今回調査を行った打越北上原古墳群第３号墳は北側台地上に存在する。北側台地上における本古墳群の現状は、種苗育場の畑地として利用されており、本古墳は前方部に大木が生い茂り、墳丘には植栽がされている。

２．調査と遺跡の概要（第 12・13 図、図版５・６）

調査目的　本古墳は、墳丘の保存状態が良好で、本市では数少ない前方後円墳であることから、昭和 59 年２月 15 日付けで袖ヶ浦町指定文化財に指定され、保護されてきた。本古墳の調査は、古くは戦後の昭和 25 年３月以前にアメリカ進駐軍将校のマッコード氏らによって調査が行われ、横穴式石室であったことが知られているが、調査の写真が数枚残っているのみで、調査結果の詳細は不明である。近年では、昭和 57 年度と平成 22 年度に墳丘測量が実施され、平成 27 年度の周溝部の調査では、市内初の鉄地金銅装の馬具片が出土し、６世紀後半の盾形周溝と推測される大規模な周溝を有する古墳であることが判明した。

平成 27 年度の調査において、小櫃川中流域から下流域における古墳群の中においても最上位階層の埋葬者が推測されることから、石室の規模や開口部の詳細、保存状態を確認し、今後の保存・活用における基礎資料とするため、調査を実施することとなった。

調査方法　後円部を調査対象とした。墳頂部に長さ６m、幅 0.7 mの十字トレンチを設定し、覆土の堆積状況を確認するため、北部・東部に幅１mのベルトを残した。ベルトで区切り、北に設定したものを１トレンチ、東に設定したものを２トレンチ、南西にＬ字に設定したものを３トレンチとした。まず、戦後の調査範囲を確認するために、昭和 57 年度の墳丘測量後に埋められた山砂を取り除いた。その結果、後円部南西側より戦後の調査範囲の広がりが確認できたため、３トレンチを拡張し、掘り下げた。山砂下層には黒褐色土が堆積し、その黒褐色土層中から大小の軟質砂岩を検出した。しかし、明確な石積みは確認できなかったことから、検出された軟質砂岩を避け、３トレンチ西側において更に掘削を行った。多数の軟質砂岩を検出したが、奥壁や側壁の石積み、底面は確認できず、掘削深度が深くなったため、安全面を考慮し、調査を終了した。トレンチの掘削は人力により行った。

遺構・遺物　本古墳は、主軸方向Ｎ－ 77°－Ｅで、規模は全長 44.5 m、前方部幅 24 m、後円部径 24.5 m、後円部墳頂部標高 53 mを測る（昭和 57 年度測量調査より）。すべてのトレンチから昭和 57 年度の測量後に埋められた厚さ 0.2 ～ 2.4 mの山砂層を確認した。昭和 25 年７月時点では、戦後調査後に埋戻しが行われていなかったと推測できる記録が残っていることから、山砂下層の２～ 16 層は戦後調査後に墳丘盛土が流れ込んだものと推測される。戦後調査以後の流れ込み土は、戦後の調査坑を完全には埋没させていないこと

から、昭和 57 年度の測量時に後円部に残っていた大きな掘削痕は戦後の調査坑の範囲を示していることがわかり、戦後調査では後円部南西側の調査を行っていたことが判明した。また、17 ～ 23 層は水平に堆積しており、その西側には戦後調査後の流れ込み土及び山砂が堆積していることから、その境となるラインが戦後の掘削ラインであり、水平堆積は古墳の盛土と考えられる。

11 層下層からは軟質砂岩を多数検出した。検出された軟質砂岩は自然石であり、一部に穿孔性二枚貝の付着及び生痕と思われる丸い穴が複数確認できる。軟質砂岩の大きさは、長さ 60 ㎝の大型のもの、25 ㎝前後の中型のもの、10 ㎝前後の小型のものに分けられる。石室石材と推測される。しかし、明確な石積みは確認できないことから、原位置から動いているものと思われるが、北西－南東方向に直線的であったことから、奥壁の方向を示している可能性もある。16 層下層からも軟質砂岩を検出しているが、明確な石積みが確認できないことから、同層下層も引き続き、戦後調査以後の流れ込み土と推測される。

出土遺物は、縄文土器１点 11.87 ｇ、黒曜石剥片１点 2.52 ｇ、古墳時代土師器 10 点 143.87 ｇであった。すべて３トレンチの戦後調査以後の流れ込み土からの出土である。また、16 層からは小片であるが、巻貝が出土した。小片のため、貝種は不明である。

３．まとめ

今回の調査では、戦後に調査された範囲の一部が明らかになった。石室石材として使用されたと思われる軟質砂岩を多数検出したが、明確な石積みは確認できず、原位置から動いたものと推測される。そのため、検出された軟質砂岩の状況から、石室の規模、開口方向は判明しなかった。しかし、今回の調査で明らかとなった戦後調査時の調査範囲と戦後調査時の写真（図版６－６、７）を照合すると、開口部は南もしくは南西方向であった可能性が高い。また、３トレンチで確認した北西－南東方向に検出された軟質砂岩が奥壁の方向を示す可能性がある。

３トレンチは、検出された軟質砂岩を避けたため、一部の範囲のみであるが、トレンチ西側において標高 49.8 ｍまで掘削を行った。平成 27 年度の調査において、後円部裾部南端の標高 49.0 ～ 49.2 ｍから旧表土層が検出されている。戦後調査時の写真（図版６－７）より石室壁面は１ｍ以上あることが推測されることから、旧表土層を掘り込んで石室を構築していたため、石室は更に下位にある、もしくは戦後調査時に石室積石の多くが動かされていない限り、３トレンチ最深部は、石室壁面の上部が検出されてもおかしくない標高である。戦後調査時の写真（図版６－７）では、石室は内部しか掘削されておらず、３トレンチ最深部の下層も戦後調査以後の流れ込み土と推測されることから、３トレンチ西側は石室内である可能性が高い。

検出された軟質砂岩には二枚貝の付着及び生痕が確認できるものがあることから、海岸で採取されたものを石室石材として使用したことが推測される。房州磯石であろうか。また、砂岩付着二枚貝の他に巻貝片が出土した。戦後調査時の写真（図版６－８）より、石室の床の周囲に貝殻が敷かれていたとの記録があり、その一部の可能性がある。戦後調査以後の流れ込み土より、縄文時代前期土器、黒曜石剥片、古墳時代前期土師器が出土したが、古墳造成時の混入物と思われ、古墳に伴う遺物の出土はなかった。

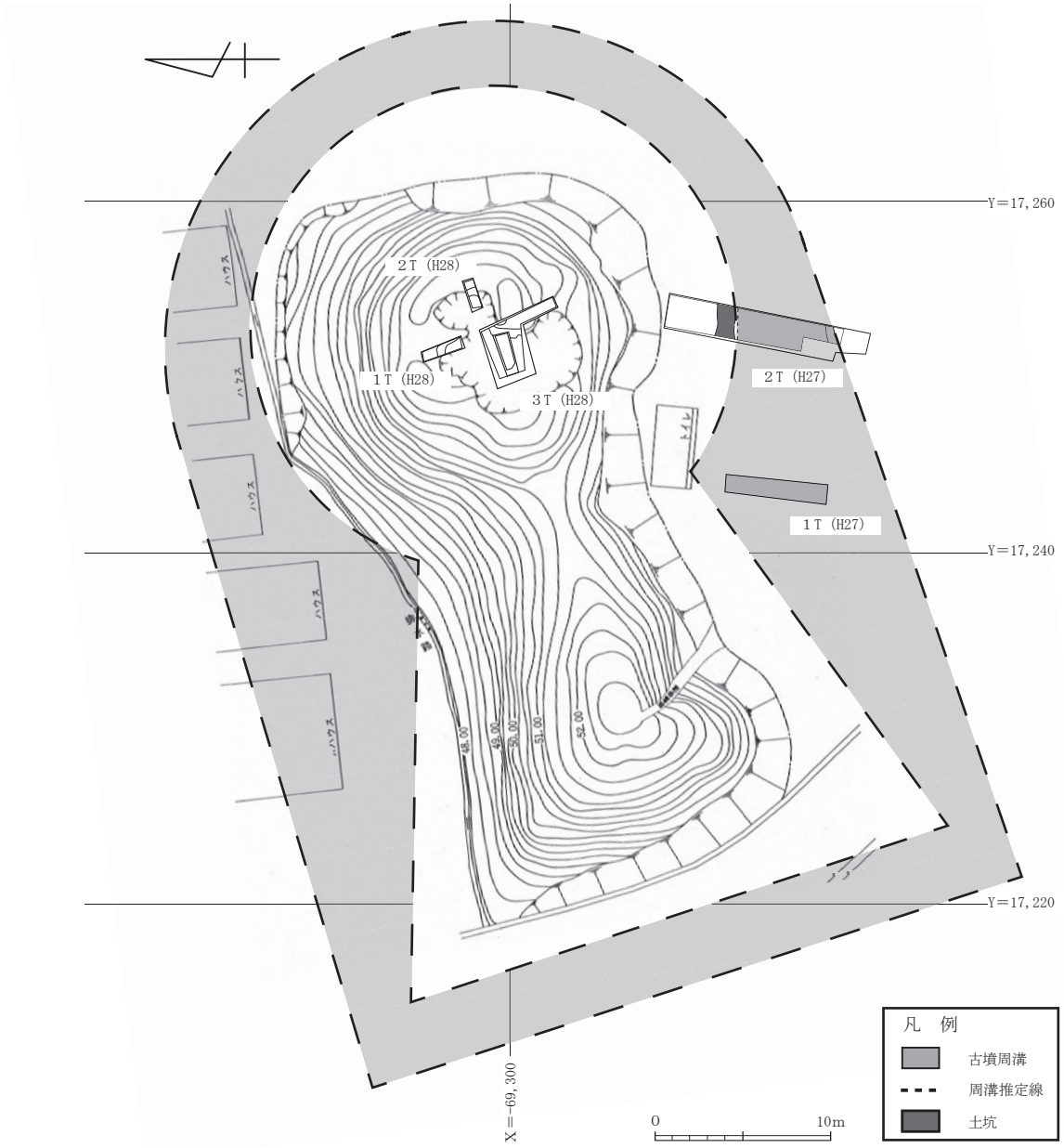
引用資料

金子　量重　1950 『打越前方後円墳写真集』

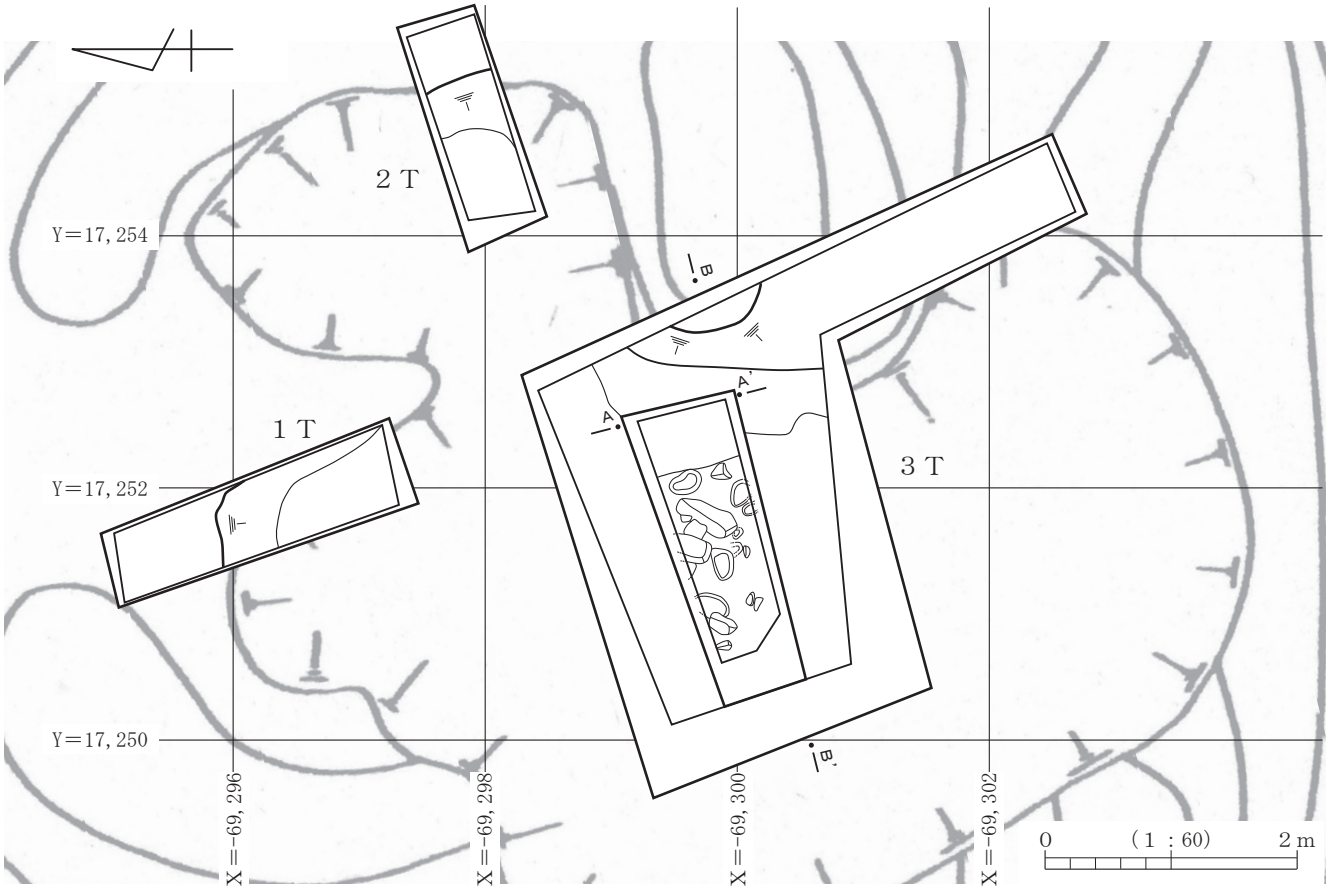
参考文献

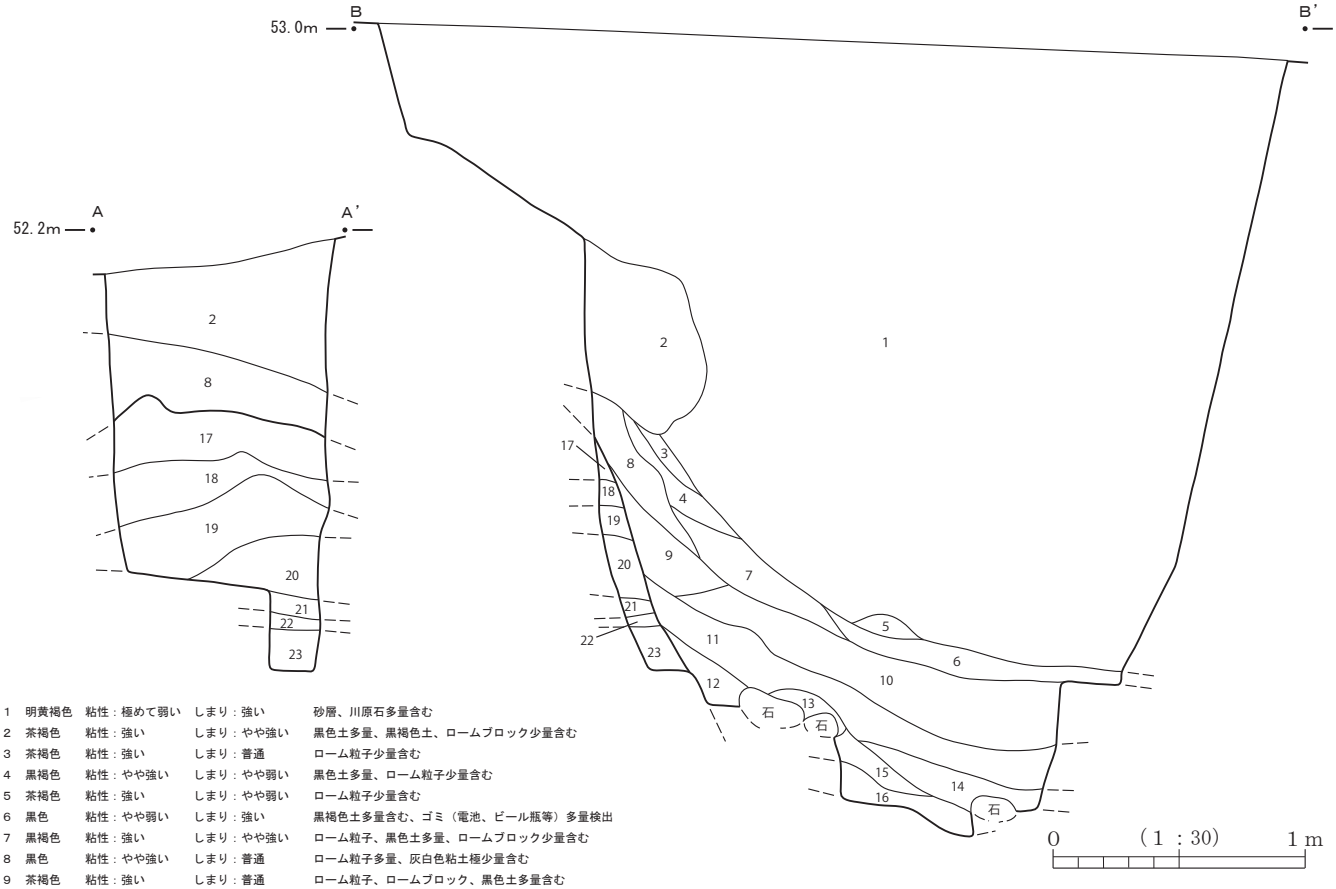
大場　磐雄（筆写・茂木　雅博） 2011 『楽石雑筆』 巻三十一 『博古研究』第 41 号　博古研究会

第 11 図　打越北上原古墳群地形図（１：5,000）



第 12 図　打越北上原古墳群第３号墳地形図、復元図（１：400）





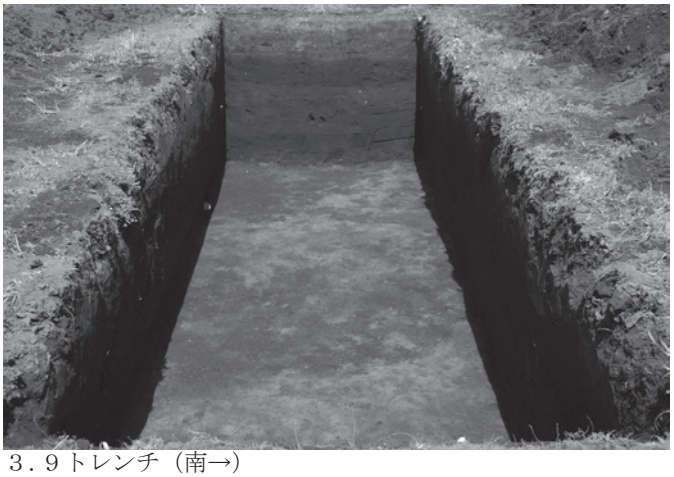
1	明黄褐色	粘性：極めて弱い	しまり：強い	砂層、川原石多量含む
2	茶褐色	粘性：強い	しまり：やや強い	黒色土多量、黒褐色土、ロームブロック少量含む
3	茶褐色	粘性：強い	しまり：普通	ローム粒子少量含む
4	黒褐色	粘性：やや強い	しまり：やや弱い	黒色土多量、ローム粒子少量含む
5	茶褐色	粘性：強い	しまり：やや弱い	ローム粒子少量含む
6	黒色	粘性：やや弱い	しまり：強い	黒褐色土多量含む、ゴミ（電池、ビール瓶等）多量検出
7	黒褐色	粘性：強い	しまり：やや強い	ローム粒子、黒色土多量、ロームブロック少量含む
8	黒色	粘性：やや強い	しまり：普通	ローム粒子多量、灰白色粘土極少量含む
9	茶褐色	粘性：強い	しまり：普通	ローム粒子、ロームブロック、黒色土多量含む
10	黒褐色	粘性：強い	しまり：普通	ローム粒子、ロームブロック多量含む、ゴミ少量検出
11	黒褐色	粘性：やや強い	しまり：普通	ローム粒子多量、ロームブロック少量含む
12	黒色	粘性：普通	しまり：やや強い	ロームブロック多量、灰白色粘土少量含む
13	茶褐色	粘性：強い	しまり：強い	灰白色粘土少量含む（砂岩付着物か）
14	茶褐色	粘性：普通	しまり：やや強い	ローム粒子、黒色土多量含む
15	黒褐色	粘性：やや強い	しまり：強い	ローム粒子、黒色土多量含む、ロームブロック少量含む
16	茶褐色	粘性：強い	しまり：強い	ロームブロック多量、灰白色粘土少量含む
17	茶褐色	粘性：強い	しまり：強い	ロームブロック多量、黒色土少量含む
18	黒色	粘性：やや強い	しまり：普通	ローム粒子、ロームブロック多量含む
19	茶褐色	粘性：やや強い	しまり：強い	ロームブロック、黒色土多量含む
20	黒褐色	粘性：強い	しまり：強い	ローム粒子、ロームブロック多量含む
21	茶褐色	粘性：強い	しまり：極めて強い	黒色土多量含む
22	黒色	粘性：強い	しまり：極めて強い	
23	茶褐色	粘性：強い	しまり：極めて強い	黒色土少量含む

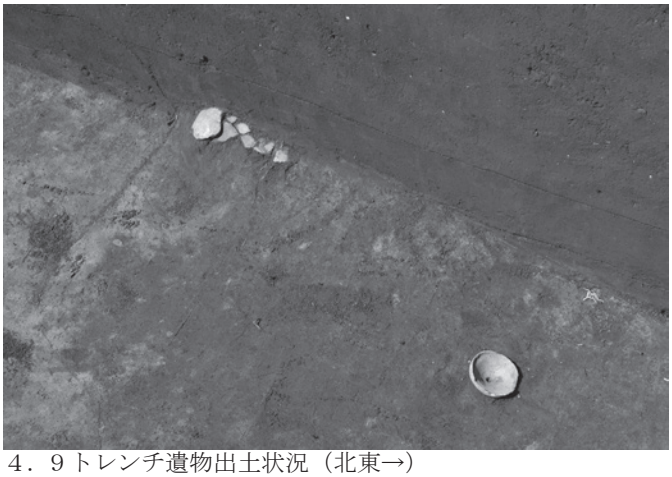
第 13 図　打越北上原古墳群第 3 号墳遺構確認状況図

写 真 図 版

１．調査前全景（北西→）

２．１トレンチ（南→）


３．９トレンチ（南→）


４．９トレンチ遺物出土状況（北東→）

５．14 トレンチ（北西→）

６．15 トレンチ（南東→）

７．16 トレンチ（北西→）

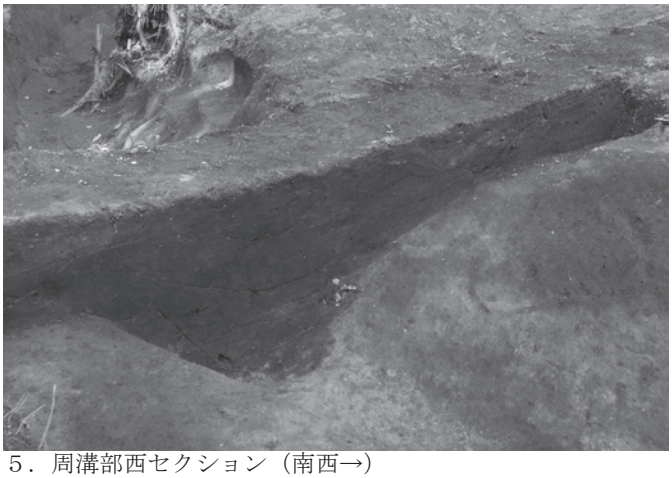
８．作業風景（北→）

１．調査前全景（南→）

２．周溝部北セクション（東→）

３．周溝部東セクション（南東→）

４．周溝部南セクション（東→）

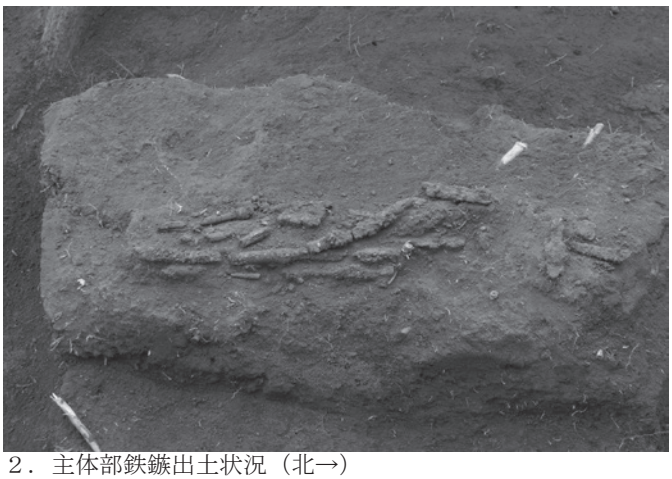

５．周溝部西セクション（南西→）

６．墳丘全景①（南→）

７．墳丘全景②（北西→）

８．主体部鉄製品出土状況（東→）

１．主体部鉄剣出土状況（南→）


２．主体部鉄鏃出土状況（北→）

３．主体部棺部南北セクション（東→）

４．主体部棺部東西セクション（南→）

５．主体部棺部完掘状況（東→）

６．主体部掘り方南北セクション（東→）

７．主体部掘り方東西セクション（南→）

８．主体部掘り方完掘状況（東→）

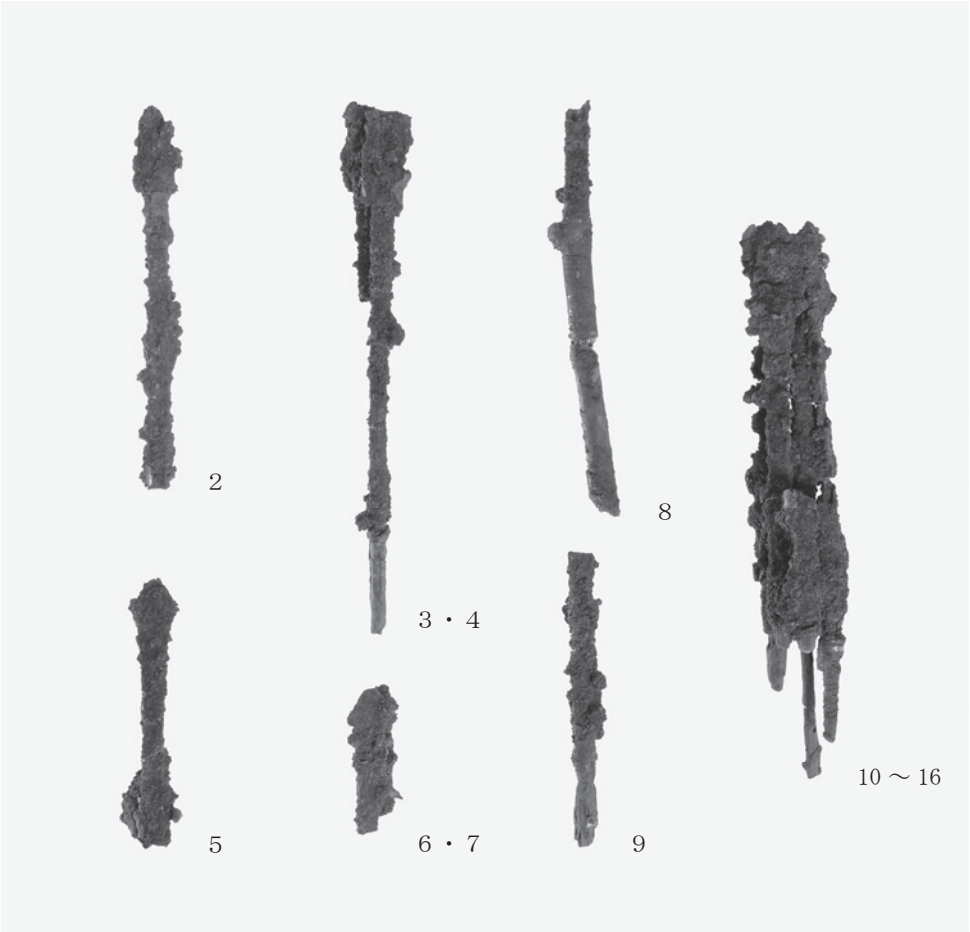
１．墳丘北セクション（東→）

２．墳丘東セクション（南→）

３．墳丘南セクション（東→）

４．墳丘西セクション（南→）

５．鉄剣



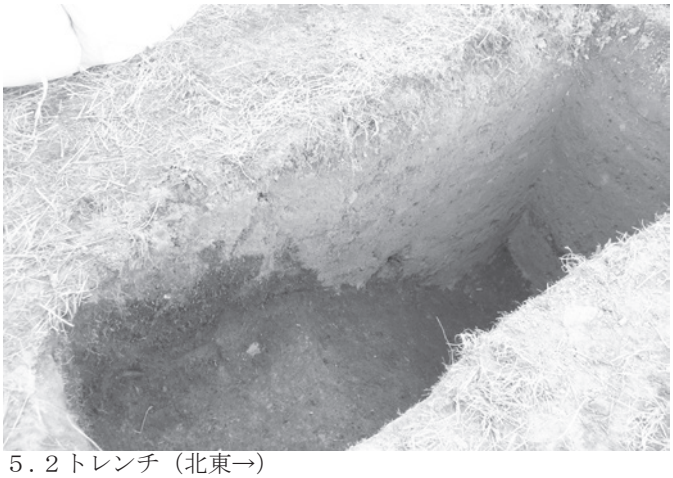
６．鉄鏃

１．後円部①（南西→）

２．後円部②（北西→）

３．後円部墳頂部（南西→）

４．１トレンチ（北→）


５．２トレンチ（北東→）

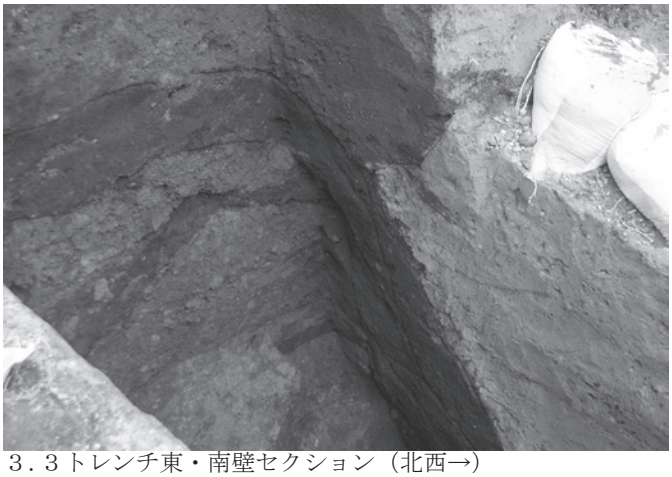
６．３トレンチ（南西→）

７．調査風景（南西→）

８．３トレンチ東壁セクション（西→）

１．３トレンチ南壁セクション（東）（北→）

２．３トレンチ南壁セクション（西）（北西→）


３．３トレンチ東・南壁セクション（北西→）

４．３トレンチ軟質砂岩検出状況①（東→）

５．３トレンチ軟質砂岩検出状況②（西→）

６．天井石と側壁の切石の壊れ（戦後調査時写真）

７．石室全景（戦後調査時写真）

８．床の周囲に敷かれた貝殻（戦後調査時写真）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	へいせいにじゅうはちねんど　そでがうらしないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	平成 28 年度袖ケ浦市内遺跡発掘調査報告書
編 著 者 名	大河原務
編 集 機 関	袖ケ浦市教育委員会
所　在　地	〒299-0292　千葉県袖ケ浦市坂戸市場１番地１　　TEL　0438-62-2111
発行年月日	2017 年３月 24 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
中六（ちゅうろく）遺跡 第 21 次調査	千葉県（ちばけん）袖ケ浦市（そでがうらし） 蔵波（くらなみ）　字（あざ）　中六（ちゅうろく） 1,259 番地 51 他	12229	SG013	35° 26’ 4”	140° 0’ 23”	20160411 ～ 20160419	123／ 921.36	確認調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中六遺跡	包蔵地 集落跡	縄文時代 古墳時代	竪穴住居４軒	古墳時代土師器	隣接する調査区から検出された竪穴住居と主軸が類似するため、同一の集落と思われる。

要　約	
	遺跡北西側の調査区であり、第 17・18 次調査区に隣接する。古墳時代の竪穴住居４軒を検出した。近隣調査区から検出されている縄文時代の炉穴は検出されなかった。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
大竹（おおたけ）古墳群 第 117 号墳・ 向神納里（むこうかんのり）遺跡	千葉県（ちばけん）袖ケ浦市（そでがうらし） 下根岸字上神納里（しもねぎしあざかみかんのり） 620 番地１	12229	SG019	35° 36’ 45”	140° 02’ 8”	20160711 ～ 20160921	200	記録保存調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大竹古墳群 第 117 号墳・ 向神納里遺跡	古墳 集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代	弥生時代溝１条 円墳１基	縄文土器 古墳時代土師器・鉄製品・石製品	墳丘は、平坦面造作、土手状盛土の構築、墳丘全体の盛土の順に構築されていることが明らかになった。

要約	
	大竹古墳群第 117 号墳は古墳時代中期の円墳であることが明らかになった。埋葬施設は木棺直葬であり、主体部棺部から鉄剣・臼玉、主体部掘り方から鉄鏃が出土した。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
打越北上原（うちこしきたうえはら） 古墳群 第３号墳 第２次調査	千葉県（ちばけん）袖ケ浦市（そでがうらし） 打越（うちこし）　字（あざ）　北上原（きたうえはら） 360 番地他	12229	SG120	35° 22’ 35”	140° 01’ 21”	20170106 ～ 20170123	13.5／ 788	保存目的調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
打越北上原 古墳群 第３号墳	古墳	古墳時代	前方後円墳１基	縄文時代土器・石器 古墳時代土師器	検出された軟質砂岩に二枚貝の付着及び生痕が確認できた。

要　約	
	戦後に調査された範囲の一部が明らかになった。埋葬施設に使用されたと思われる軟質砂岩を多数検出したが、戦後の調査により原位置から動いているものと思われ、石室の規模、開口方向は不明であった。

2017年3月17日　印刷
2017年3月24日　発行

平成28年度
千葉県
袖ケ浦市内遺跡発掘調査報告書

中六遺跡第21次調査　大竹古墳群第117号墳・向神納里遺跡　打越北上原古墳群第3号墳第2次調査

発行　袖ケ浦市教育委員会
千葉県袖ケ浦市坂戸市場1番地1
電話　0438-62-2111
印刷　ワタナベメディアプロダクツ株式会社
千葉県木更津市潮見4丁目14番4号
電話　0438-36-5361